
Sister Panic！！

春夏秋冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sister Panic!!

【Nコード】

N9706Y

【作者名】

春夏秋冬

【あらすじ】

俺、瀬川和樹は二人の妹と三人で平々凡々に暮らしていた。そこに海外で働く母から突然の電話。「近いうちに妹が三人そっちに行くから。」おっと全く話が見えないぞ？そうかこれは夢だな。夢の中での電話だったんだな。起きたらいつもどおりだ！オヤスミ！！起きたら妹が五人いました。なんか俺嫌われてるし！なんだこれ！？これからどうなるんだ！？

日常系コメディー中心です。

プロローグ

プルプルプルルルル。

「はい、こちら瀬川ですけど。」

「お兄ちゃんのパンツは今何色かな？きやは」

ガチャ。

さーて、寝るかなあ。

プルプルプルルルル。

「もしもし？」

「も〜つれないわねえ。その声は和樹ね。いつからそんなに冷たくなっちゃったの？お母さんさみしくて泣いちゃいそう…。」

「では何か？今日は純白のブリーフだよ！お母さんは！？とでも答えろと？俺は変態か！」

「心配しなくてもあなたは立派な変態よ。そこだけはお母さん譲れないわ。ちなみにパンツは穿いてないわ。」

「譲れ！！そこは俺の名誉のためにも全力で譲ってくれ！！そしてパンツを穿け！！」

「そんなことより、そっちはどう？ちゃんとやってる？」

「そんなことで片付けていい問題なのかは甚だ疑問だが、まあ問題なくやってるよ。」

「成績も？」

「失礼。訂正させてもらおう。成績以外は問題なくやってます。」

「その点は今度帰ったときにじっくり聞くとして、千夏達は元気？」
しまった。自ら地雷を踏んでしまった。

「お手柔らかにお願いします。あゝ千夏も愛菜も相変わらずだよ。ちゃんと元気にやってる。掃除、洗濯その他もろもろもしっかり分担してやってるよ。」

「さすが和樹ね。お母さんの聞きたいこと全部理解してるなんて。感動で服を脱いじゃいそう。」

「俺は母さんが全く理解できないよ。で？本題は何？何か言いたいことがあったんでしょ？」

「あら気付いてたの？驚いてお母さんブラが取れたわ。やるわね和樹。」

「なんだ！？それどんな状況だ！？俺にはさっぱり理解できない！

「！」

「冗談よ。じゃあ本題に入るわね。ちょっと聞いてる？」

「母さんの冗談は冗談に聞こえない…。で、何？」

「近いうちに妹が三人そっちに行くわ。」

おっと、急に話が見えなくなったぞ？

「じゅめん、母さん。もう一度言ってくれろ？」

「もう！あんたはついに日本語まで聞き取れなくなってしまったの？あなたの国語のテストの点が心配だわ。さては一桁ね。」

「うるさいな！ギリギリ二桁はあったよ！で、なんて!？」

「ギリギリ!？今、アンタギリギリって言った!？」

えらい！やかましいやつだ！

「そんなことは今は問題じゃないだろ！妹が三人ってどういことと

だよ！俺には妹は二人しかいないはずだし、その二人は今自分の部屋で寝てるはずだ！なんだ！？分裂したのか！？スモールールのように！？」

「保護者としては大問題なんだけどね…。まあいいわ。とりあえず、新しい妹が三人そっちに向かってるから、詳しくはその子達に聞いて。ちゃんと優しくしてあげなさいよ。これから家族になるんだから。じゃ。」

ガチャ。

「えっ！？ちょっと！？母さん？母さん！？」

ツーツー。

「切れた…。」

『妹が三人そっちに向かってるから。』か……。

「全くもって意味不明だ…。」

そのつぶやきは誰に聞こえることもなく、漆黒の闇に吸い込まれるように消えていった。

第一話 出会い

シリシリシリシリシリシリシリ。

ベシー！！

「ん．．．朝か．．．。」

うーん、なんか変な夢を見たような気がするなあ。妹が三人増えるとか何の冗談だよ。ただでさえ二人で大変なのに三人も増えたらこの家は崩壊しちまうぞ。

そんなことを思いながら階段を下り、リビングに出る。

「あれ？風呂場の電気が点いてる？」

昨日消し忘れたか？まあいいや。

ガチャ。

「えっ？」

目の前に全く知らないタオル一枚の少女が現れた。さてどうする？

- 1、謝る。
 - 2、見なかったことにする。
 - 3、ごまかす。
 - 4、逃げる。
- ピッ。

「失礼、間違えました。」

ガチャ。

「きゃああああああああああああああああああ！！！」

「うわああああああああああああああああ！！！」

ち、小さい肉まんが！！肉まんが二つ！！ええい！離れる俺の煩惱
！なんだ？どういうことだ！？あれは一体誰なんだ！？

「何事だ！？兄ちゃん！！！」

「どうしたの！？お兄ちゃん！！！」

「佳奈！何があったの！？」

「.....?」

更に二人増えました。


~~~~~

「つまりどういことなのかな？」

「私達三人はあなた達と兄妹になりました。」

うむ。全く話が見えてこない。

ちよつと整理しよう。今俺達は三人ずつ二つのソファーに座って向かい合っている。よしここまでがいい。

まず俺が座っているほうのソファーは、中心が俺。左が妹の愛菜。右も同じく妹の千夏。千夏が着ているものが俺のＴシャツと自分のパンツだけということを除けばこれもよし。

続いて対面、妹を名乗る謎の三人組。中心に雅と名乗る少女。左に先ほどの貧乳少女、名前は佳奈とか。右には、優希と言われている少女がちょこんと座っている。ちなみに全然しゃべらない。まあとりあえずはよし。

問題はこの三人がいきなり『妹です』とか言って現れたことだ。うん、どういことだ？もしかして隠し子？生き別れの妹。いやい

やそれはない。そもそも父さんは愛菜が産まれる前に死んだからなあ。

「すみません、面白い顔しているとこ申し訳ないんですが．．．。」

「してない！面白い顔なんてした覚えは一ミリたりとも存在しない！！」

「す、すみません。あまりにお顔の調子がよろしくなさそうだったので、つい．．．。」

遠まわしにすごく馬鹿にされてる気がするのには気のせいだろうか．．．。

「おい！兄ちゃんは面白い顔なんてしてねーぞ！」

おっ！千夏！兄ちゃんを庇ってくれるか！なんて心の優しい子なんだ。兄ちゃん感動で涙が出そうだよ．．．。

「兄ちゃんの顔はいつもブサイクだー！」

「お、お兄ちゃん！？すごい勢いで目から水が溢れ出てきてるけど

大丈夫!？」

ほっといてくれ!!俺はどうせブサイクだ!!

「すみません……。私が変なことを言ったばかりに……。」

「ああ……」本当のことだから、気にすんなよ。「」

ボカツ!!

「いってー!!何すんだよ兄ちゃん!!」

「お前はもうしゃべるな!」

話が進まん!!そんなことよりも……。

「一体どういことなんだ?いきなり妹になりましたって言われても、こっちは何がなんだか……。」

「瑠璃さん……お母様から何か聞いていませんか?」

母さん？母さんが何かって・・・ま！まさか！！

「も、もしかして、妹が三人向かってるっていうあの「コト」か！」

「よかった。ちゃんと伝わっていたんですね。」

「あ、ああ。」

あ、あれは夢じゃなかったのか。寝ぼけててつい夢の話だとばかり・・・。

「兄ちゃん、妹ってどういうことだ？」

となりの千夏が聞いてくる。ん？なんだ？ちょっと怒ってる？

「お兄ちゃん・・・。どういこと？」

「おわあ！？」

愛菜が切れてる！顔は笑ってるけど、心が全く笑ってない！！超怖



「明らかに初めての25分はいらなかったよね？王国がどうか・・・」

「な、何言ってるんだよ、ぐすつ・・・なんて悲しい話なんだ・・・ひっく。こんな悲しい話で泣かないなんて兄ちゃん人間じゃない！！！」

ひどい言われようだ。

「とりあえず、経緯は理解しました。まあこっちとしては、驚いただけで別に追い返そうとしてたわけではないし、母さんが決めたなら文句はないよ。な？千夏、愛菜？」

「おう！」

「うん！」

「ありがとうございます！それじゃあこれからよろしくお願いしますね。ほら、優希も佳奈もあいさつして。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん。」

優希と呼ばれた子が顔を上げて俺の方にトコトコ歩いてくる。なんだ！？

「……………優しい匂いがする。……………お日様の  
匂い。……………すう」

そういつて俺の膝の上に乗って寝てしまった。

お日様の匂い？ちゃんと洗濯したはずだけどな……。

「ふふっ。優希ったらもう和樹さんのこと好きになっちゃったみたいね。」

「はぁ……………。」

よく分からないことを言われたがとりあえず悪感情ではなさそうなので良しとしとじっ。

「むう……………。」

「……………。」

両隣から発せられる凶悪なオーラについては気付かなかったことにしておこう。ってかなんで怒ってたんだ？

パンツー!!

「ちょっと 안타ー!!」

いきなり、立ち上がって俺を睨みつけるミニ肉まん。もとい佳奈。

「聞いてんの!? アンタよ! アンタ! 無視するんじゃないわよ!」

なにやらずいぶん虫の居所が悪い様子。ここは一つ落ち着いて対処しよう。

「まあ落ち着け。我が妹よ。」

「だ・れ・が・妹・じゃー!!!」

「うわあー!!」

フォ、フォークが飛んできた!! 俺の眉間めがけて!! こ、こいつ! 出会ったその日に兄貴を冥土に送るつもりか! 危険すぎる!

「な、何するんだ!? いきなり危ないだろ!!」



「うるさい！あんた私に何か一言ないわけ！？人の、そ、その！・・  
は、裸見といて！何か言うことはないわけ！？」

どうやらこの娘っ子は、裸を見られたことを気にしているようだ。  
といっても実際はタオルで見えてないんだけどな・・・。

まあでもこのお年頃の女の子はこういうことに敏感だからな。こっ  
は一つ大人の余裕というやつを見せてやろう。

「いいか？よく聞け。佳奈よ。」

「な、何よ！？」

「女の魅力は胸じゃない・・・・・・・・・・うなじだ！！」

ポゴォ！！

「ぐっはぁ！！」

「ねえ。お姉ちゃん、この人殴っていい？」

「落ち着いて、佳奈。あなたはすでに殴っているわ。」

「くっ！マニアックすぎたか！」

「お兄ちゃん、そういう問題じゃないよ・・・。」

ああ・・・これから俺はやっていけるのだろうか・・・。

## 第二話 佳奈の想い

「私にあんたを兄貴なんて認めないわ!!」

「ぬう、この俺のどこが不服だと申すか!!」

「全てよ!!」

ぬぬう。手厳しいなあ。。。仕方ない。

「わかった。俺が悪かった。素直に謝るよ。裸を見せてくれてありがとうございました。」

ボゴオ!!

「あんた。。。謝る気。。。ある?」

「すみませんでしたあ!!自分ちヨーしこいてました!!マジすんませんつしたあ!!」

やべー!こいつ素手で壁に穴を開けやがった!シャレにならん!

「大体、お姉ちゃんと優希はいいの!?こんなブサイクで馬鹿で変

態な男が兄貴でも!？」

なんつー言われようだ。まあ事故とはいえ、裸を見られかけたら誰だって怒るわな。ちよっと反省。

「私は大歓迎よ。和樹さんは優しいですし。面白い方ですから。 . . . . . 主に顔が。」

「顔っ!？」

俺そんなにブサイクだったんだろうか。ショックだ . . . . .

「 . . . . . お兄いい匂いがする。 . . . . . 私は好き。」

ふおお。この無表情な顔の子の上目づかいは反則級の可愛さだ。おもわず頭を撫でてあげたくなる。

「 . . . . . んっ。」

気持ちよそそつだ。おもわず顔が綻ぶ。



「お前も兄ちゃんの妹、私達の家族になるんだから教えといてやるよ。」

何を言うつもりだ・・・？千夏？

「確かに、兄ちゃんはブサイクで馬鹿で妹のパンツをさも自分のもののように穿く変態の中の変態だ。」

「待った！ストップ！捏造されてる！兄ちゃんそんなことした覚えはないんだけど！？」

「兄ちゃんは少し黙ってて！」

なんだ？どうなった？なんで俺が怒られてんだ？全く理解できないぞ？？

「その変態がなんなのよ！！！」

「お前は兄つてのがどういう意味を持って産まれてくるのか知ってるか？ただ単に早く産まれたって意味じゃねえんだよ。」

「だから何よ!!」

「どんなに早く産まれてもどんなにカツコよくて、スポーツができて頭が良くて、次に産まれてくる弟や妹を守るうともしないやつは兄なんかじゃねえし、きつと兄なんて呼ばれねえよ。」

千夏 . . . .。

「でもなあ！普段どんなに適当でも、どんなにダサくても、変態で頭が悪くても! . . . . . いざというときには絶対に助けに来てくれる！守ってくれる！そんな人だからこそ兄って呼んでんだよ！妹や弟にとって唯一のヒーローなんだよ!!」

「だったら!! だったら何なのよ!!」

「まだ分かんねえのか!! お前は兄ちゃんを . . . . ! 家族のことをどうでもいいと思っっている男と馬鹿にした! 私や愛菜が誰よりも尊敬してる兄ちゃんを馬鹿にしたんだ! 兄ちゃんはなあ! 父さんが死んでから今までずっと私や愛菜の面倒を見てくれてんだ! 守ってくれてんだ! 母さんが仕事で忙しい分、私達に愛情をくれてんだよ! 誰よりも家族のことを想ってくれてんだ! そんな兄ちゃんを馬鹿にすんじゃないよ!!」

「ッ！私だつて！！私だつて……！！！」

バツ！タツタツタツタ……バンツ。

「あ！佳奈！！！」

「あつ！おい！！！」

あー。外に出て行っちゃまった……。

それよりも、あいつ泣いてた気がするけど……気のせいかな……？

~~~~~

佳奈が外に出て行ってから一時間が経過した。

「千夏、あんまり気にすんなよ？元はと言えば俺が完全に悪いわけだし、お前の言ってくれたことは兄ちゃんメチャクチャ嬉しかったからな。」

「うん……でも自分でもびっくりしてんだ。兄ちゃんが変態とかブサイクとか言われてるときは全く気にならなかったのに……」

「いや、そこは気にしろ！めっちゃ気にしてくれー！」

妹達の中での俺のイメージは一体どうなってしまっているんだろうか……。

「和樹さん、ちょっといいですか？」

「あつ。うん、すぐ行くよ。」

なんだ？雅のやつ、やけに深刻そうな顔してたなあ？

まつ！まさか！佳奈を苛めた罰として何かされてしまうのか、俺はいいやいや苛めてないけど、いやでももしかしたら……。

「あの、和樹さん？」

「ひゃああい！？今行きましゅるっ！ー！」

「気のせいだ。忘れてくれ。」

どうやら制裁ではなかったようだ。助かった。

「あれ？でもなんで雅が謝るんだ？」

「佳奈のこと怒ってますよね？」

ああ。そういうことか。

「いや、全然。っていうか元はと言えば俺の責任だからな。」

「そうですか……。よかった。」

「それにしても、佳奈っていつもあんななのか？」

「あんなとは？」

「うーん、なんていうか、ピリピリしてるといつか気を張ってるや
いづか……。」「。

もちろん新しい環境になれていないってのもあるんだろうけど、それ以外の理由があるような気がするんだよね……………。

「気付いてたんですね……………」

「ってことはやっぱり。」

「はい、あの子のアレにはちょっとした理由があるんですよ。」

「理由？」

「私達が祖父の家で暮らしていたことはお話ししましたよね？」

「ああ。」

両親を早くに亡くした彼女らは早くから祖父の家で暮らしていたらしい。

「実は、祖父と私達はあまり良い関係ではなかったんです。」

ああ。だからか．．．。

「寂しかったんでしょうね。あの子は。甘えられる相手が見つからなかったんでしょう。私はあの子に甘えてもらえなかった．．．。そんなに頼りなく見えていたんですかね。私は、姉失格です．．．。」

そういつて雅は顔を伏せた。泣いているのだろうか．．．。

「大丈夫だ！！これからは俺が五人まとめて守ってやる！！だからお前も、もう気負わなくていい．．．。」

自然と体が動いていた。自然と口から言葉が出ていた。なぜかは自分でも分からなかったが．．．。

「和樹さん．．．。」

「違うだろ？」

「えっ??？」

雅がきよとんとした顔をする。

「兄さん、だろ??」

「……………はい！兄さん！！」

この家に来て、雅は初めて笑った。その顔はいつものような大人びたものではなく、年相応の無邪気な少女の顔だった。

外では雨が降り出していた。

~~~~~

「も……………最悪だ。私。」

勢いで飛び出してしまい、かといって知らない町で遠くまでいけるはずもなく、がむしゃらに走っていたら、足をひねってしまっ  
て痛くて歩けない……………。

「拳句の果てには、雨までぶってきちゃったし。」

痛む足を引きずって公園の屋根つきの遊具の下にもぐりこむ。

「私なんであんなこと言っちゃったんだろう。」

裸を見られたことは確かに恥ずかしかったけど、よく考えればあれは事故であって、落ち度は両方の不注意にあったことは明らかだ。じゃあなんで……。

「やっぱり、羨ましかったのかなあ……。」

そう。あの三人を見ていて初めに思ったことがある。それは『信頼』普通に話してるだけでも伝わってくる。お互いを信頼して、理解している優しい気持ち。

私はずっと欲しかったもの。

お姉ちゃんと優希のことはもちろん大好きだけど、お姉ちゃんはずっと大変そうだった。私達のために自分を捨てて私達の面倒を見続けてくれている。そんなお姉ちゃんにこれ以上負担はかけられない。

「怒ってるよね、絶対……。」

あの千夏という人が怒るのも当然だ。私だってお姉ちゃんのことをあんなふうに言われたら怒っているだろう。あの人のいう通り、和樹という人もちよつと変わっているけど、とても優しい人だというのは伝わってきた。

その証拠に優希が自らあの人のもとに近づいていったじゃないか。あれには凄く驚いた。優希は滅多に男の人と話さないのに、自分から行くなんて初めて見た。相当優しい匂いがしたのかもしれない。(匂いとかは私にはわからないけど。)

「どうしてこうなっちゃたんだろ……………」

本当はとっても楽しみにしていたんだ。瑠璃さんはとっても優しくつたし、その人の子供なんだからきつと私達を受け入れてくれるって思ってた。実際、受け入れてくれたし、すつごく嬉しかったのに、くだらない羞恥心で全部台無しにしてしまった。

自分で自分に腹が立つ。と同時にもうあそこには戻れないという不安感と孤独感が襲ってくる。

あんなに暖かかった場所なのに……………。やっと見つけた私達の居場所だったのに……………。



「寂しいよ……。」

頬を伝う涙が一粒また一粒と流れていこうとしたその時……。

「こんなところにいたのか……。」

頭上から声かけられた。

「う、うそ？な、なんで？」

「服も濡れてるな……。そんな状態じゃ風邪引くぞ。ほら帰ろう。」

なんで来てくれたの。あれだけひどいこと言ったのに……。あつ！早くお礼を言わないと！

「な、何しに来たのよ！！私のことなんてほっといてよ！」

また言ってしまった！迎えに来てくれて嬉しかったのに！自分の気持ちを素直に出せない……。どうしよう。怒っちゃったよね。帰っちゃったらどうしよう……。

不安が心の中で渦を巻く。でもその彼は……………。

「ごめんな。朝のことは本当に俺の不注意だった。せつかく新しい家族との第一歩だったのに台無しにしてしまった。」

そんな言葉と共にタオルを頭にのせてくる。

「……………どうしてそんなに優しくしてくれるの？……………あんなにひどいこと言ったのに。」

私にはわからない。ここまでしてくれる理由も、意味も。

「理由なんてないよ。」

「えっ？」

「俺達、兄妹にはさ、父さんがいないんだ。俺が七歳で千夏が五歳、愛菜がまだ母さんのお腹の中にいるときに、交通事故で死んだんだ。」

その話は瑠璃さんからも聞いていた。

「正直、俺はその時のことをあんまり覚えてないんだけど、母さんは、俺は一度も泣かなかった、強い子だったって言ってた。でも俺は思うんだ。多分俺はその時、泣かなかったんじゃないかって、泣けなかつたんじゃないかって。」

淡々と話す彼の目は遠いどこかを見ているようで……

「隣では千夏が毎日泣いていて、それをなだめるので精一杯だったし、母さんは愛菜のことがあつて手一杯だったからかな。幼心に思つたんだと思う。俺が家族を守らないとつて。」

とても優しいものだった……。

「今思えば、ガキが何言つてんだって感じだけどね。その後はやっぱり大変だった。料理は作れないわ、母さんは仕事でいないわ、愛菜は泣き出すわ、千夏は勝手にどっかいくわ、毎日がてんやわんやだった。自分の時間なんてほとんど無かつたよ。」

「それでも……、それでも、妹達が元気で暮らせるなら、それでいいって思つたんだ。」

羨ましい…………。

「だから、俺はたとえ何を言われようと、妹がいなくなったら捜しにいくし、助けを求められたら、必ず助けに行く。それが家族つてもんだろ？」

この人達の絆が本当に羨ましい。

「私にも…………。」

「ん？」

「私にも、いつかそんな家族ができるかな!？」

「何言ってるんだよ。」

「……………」

「もうとっくに手に入れてんだろ？お前は俺の妹なんだから。」

「うえ．．．．．ひっく．．．．．うわああああああん！」

我慢していたものが溢れるように涙となって頬を流れていく。

私は彼の胸でまるで赤子のように泣いた。彼はそんな私を守るようにいつまでも優しく抱きしめてくれていた。

~~~~~

佳奈をおんぶして傘を差して帰るのには、流石に苦労した。少し運動しないとだめかな．．．．．。

「ちよつと！早く歩きなさいよ！濡れるじゃない！」

こいつ．．．．．落としちゃってもいいかなあ。

「早く行かないと、殴るわよ．．．．．。」

「ひいひいひい！」

なんつー暴力的な妹だ！なんでもかんでも暴力で解決するのは兄ちゃんいけないと思います！

「……………殴るわよ？」

「暴力万歳！！」

何を言っているんだ俺は……………。

そうこうしてるうちに家についた。

「ほら、入れよ。」

「う、うん。」

「大丈夫だよ。みんな家族だからな。」

「うん……………。」

ガチャ。

「あっ！お兄ちゃん達帰ってきた！！」

そう言っつて全員集まってくる。

「佳奈！よかった……………心配したんだよ？」

「……………佳奈がいないと私、寂しい。」

「うん……………ごめんね。」

「お兄ちゃん、佳奈お姉ちゃん！お帰りなさい！」

「うん……………愛菜、心配させてごめんね。」

各々が佳奈を迎え入れる。さて、あとは一人だけだな……………。

「千夏、そこにいるの、バレバレだぞ。」

「うっ。兄ちゃん、お帰り。」

「それだけか？」

そう言つと、千夏は真っ直ぐに佳奈のほうを向く。ちょっと顔が怖いぞ、千夏。

「あの……その……ひどいと言つていいんじゃない。」

「……。」

「……あのっ。」

「あー！もう！じれったいなあ！なんだそのへなへなした態度は！！もっとシヤキつとしろ！！帰ってきたんなら堂々とただいまって言え！お前は私の妹だろうが！！！」

「……うん！ただいま！千夏お姉ちゃん！」

「やれやれ……。」

いろいろあったが、こうして、新しい家族を迎えた瀬川家の新しい生活はスタートした。

第二話 佳奈の想い（後書き）

作者に何が起こったのか、異常に長くなってしまいました。しかも後半はやたらシリアスな雰囲気になってしまいました。コメディーを期待してた人ごめんなさい。でもこの話は、和樹たちと佳奈たちが歩み寄る大事な場面だと思ったので書きました。ここからはコメディー全開になっていくと思うので、ここで読むのを止めるなんて言わないで下さい。作者が泣きます。よければ感想等よろしくお願ひします。ではまた次回会いましょう。

第三話 家族会議

雅達が俺達の家族になって一週間が経過しようとしていた。

ここで俺達、瀬川家の兄妹の構成を再確認しておきたいと思う。

俺・和樹（高2） 雅（高1） 千夏（中3） 佳奈、優希（中2）
愛菜（小5） （佳奈と優希は同学年だが、佳奈は4月生まれで、
優希が3月生まれなので、実質的には佳奈が姉。）

「うーん、大所帯になったもんだ……。」

「兄さん、ちょっといいですか？」

「どうした雅？今日も可愛い顔してどうしたんだ？」

「ありがとうございます。兄さんも今日はちゃんと目と鼻と口がついていてかっこいいですよ。」

「今日は！？えっ！？何！？どっぴいっことー！？」

たまについてないことがあるの!?

「そんなことはいいんです、それより家のことについてなんですが」

「よくない!よくないぞ!?それは俺にとっては何よりも優先するべき最重要事項だ!」

「いいじゃないですか。今日はついているんですから、何も問題はありません。」

「ついてない日があることが大問題だ!その日は俺の顔つるつるなんだろ!?気持ち悪すぎるだろ!」

目と鼻と口がついてない日ってどんな日だ……。今度……。病院行く……。。

「いいじゃないですか。兄さんの顔は目と鼻と口がついててもちゃんと気持ち悪いですよ?」

「うわああああん!」

ダッ！！バン！！

「うわっ！？なんだ！？兄ちゃんが号泣しながら外に出て行っちゃまったぞ！？」

~~~~~

我に返って家に戻ってみると、全員がリビングのテーブルに座っていた。

「お兄ちゃん、どこ行ってたの？」

「ちょっと顔のパーツを捜しにな……………」

「????？」

「そんなことよりも、雅お姉ちゃん、いきなり全員呼んでどうしたの？」

俺と愛菜が話していると、佳奈が質問をしていた。そういえばさっき何か言いかけてたな……………。

「そうだ。一体どうしたんだ？いきなり全員集めたりして。」

「はい、そろそろ家族会議をする必要があると思ったんです。」

「家族会議？」

「そうです。引越しの後片付けも落ち着きましたし、佳奈と優希も新しい生活にある程度なじんできたので、ここらへんでこれからの生活について話をするべきなのではないか、と思ったんです。それに一度こうやって、全員でお話する機会も欲しかったですし。」

「……………自分のお部屋があるの、うれしい。」

優希が嬉しそうにささやく。

「そうだな。そろそろ決めないといけないこともあるしな。」

「はい。」

「じゃあ始めるか！家族会議！！」

「「「「おー！」「」」」

~~~~~

「では、さっそく家族会議を始めたいと思います。」

今日の議長は雅だ。まあ俺よりはうまく司会進行してくれるだろう。

「それではまず私のスリーサイズからお話しましょう。」

全然そんなことはなかった。

「待った！それは今は必要な情報じゃないか！」

「うう……………兄さんは私の身体なんて全く興味が無いんですね……………」

「あえて言おう！興味津々だ！！」

ボカッ、ギユ、ヒュッ。

「うばあー!!」

千夏からはエルボーをもらい、愛菜からはつねられ、佳奈からは手元にあつたペンを投げられた。ものすごく痛い。

「な、何すんだよ．．．!!」

「ケツ!」

「お兄ちゃんのバカ!」

「フン!」

なんだ?こいつら、急に機嫌が悪くなりやがった。反抗期か?．．．
．．．とそういえば優希からは何もされなかつたな．．．。

「やっぱり優希は優し．．．。」

ジッ。

なんだかものすごく見られていた．．．。睨まれているわけ
ではないが、なんだろっ?すごく怒っている気がする．．．。

「あ、あの……優希さん？」

「……………」

む、無言の圧力！！冷や汗が止まらない！

「いっ！めんなさい！」

「……………」

それだけを言っつて視線を前に戻す優希。超怖かった……………。

「まったく、雅お姉ちゃん、こんな馬鹿兄貴に付き合ってたら日が暮れちゃうわ。話を進めて。」

「その通りね。じゃあまず家事全般からいきましょつ。」

「なぜ俺が悪者に……………！腑に落ちん！」

もうワケがわからない。

「じゃあ、家事全般はどうでしょうか？何か意見はありますか？」

「普通にサイクルでいいんじゃないか？」

「それだと少し不安ですね。佳奈は料理ができないですし、優希は背が低いので洗濯物を干したりするのは少しつらいかと……」

「なるほど。」

つていうか佳奈、料理できないのか。見た目通りだな。

ヒュッ。

「兄貴、なんか失礼なこと考えてない？」

「な、何も考えてないぞ！」

こいつ心を読みやがった！お前はサトリか！

「なあ、雅姉ちゃん、得意分野で分けたらいいんじゃないかねえのか？」

「千夏がそんなまともな案を行ってくれるなんてお姉ちゃん思ってもみなかったわ。得意かどうか自分で言うのは信憑性にかけるので、推薦方式で一度決めてみましょうか。」

「へへ……！それほどでもねえよ。」

おい、馬鹿にされてんぞ、気付け千夏。っていうか雅は根はDSなんだな……。気をつけよう。

「それじゃあ、まず洗濯は誰がいいと思いますか？」

「兄ちゃんが洗って干してくれる服はいつもいい匂いがして気持ちいいぜ！」

「おっ？そっか？そっ言ってくれと兄ちゃんうれしいぞ！」

「では、『洗濯・兄』と。」

雅が紙に書き入れていく。

「次は料理ね。」

「……………お兄の作ってくれる料理……………
すくおいしい。」

優希がうれしいことを行ってくれる。

「そうか。そう言ってくれれば兄ちゃんも作る甲斐があるってものだ。」

「それじゃ『料理・兄』と。」

「次は掃除ね。自分の部屋は自分ですとして、他の場所ね。」

「悔しいけれど、兄貴の掃除スキルは本当に凄いなと思うわ。兄貴が掃除した後はチリ一つ残ってないもん。」

おお、まさか佳奈から褒められるとは……………。

「ありがとうな。佳奈。」

「べ、別に本当のことを言っただけよ！」

うむ、よいツンデレだ。

「じゃ、『掃除・兄』と。」

「次は買い物かしら。この中に買い物上手はいるかしら。」

「買い物ならお兄ちゃんが一番だよ！だって9980円の蟹を500円まで安くしてもらったことあるもん！」

「ふふん、俺に値切れぬものなど無いわ！」

その店、出禁になったけどな。

「『買い物・兄』と。」

.....

「決まったわ！」

そういつて雅が紙を見せてくる。そこにはこんな風に書いてあった。

家事・兄

補欠・妹×5

「なあ……。この図は何かがおかしいと思わないか？」

「「「「完璧。「「「「」

「どこがだ！？お前らの目は節穴か！？家事の分担作業を決めるのに『家事・兄』ってなんだ！？俺には分担されているようには全く見えないんだが！？」

「ま、まさか！？兄さん、何か不満があるんですか！？」

「まさかどころか不満しかねーよ！！それに補欠ってなんだ！？家事の補欠なんて聞いたことねーぞ！？」

「何を言ってるんですか？兄さんは補欠の重要性を全く理解していないようですね……。」

「兄ちゃん、頭わりーなあ。」

「無能ね。」

「……………残念。」

「ひつく……………ふえ……………」

な、なんだ！？意味不明すぎて混乱してきたぞ……………？ここは雅の話をよく聞いてみる必要があるだろう。

「いいですか？この補欠というものは、いついかなるときでも兄さんの代わりを務められる、いわば親衛隊みたいなものです。」

「ふむ……………」

親衛隊……………。なんか補欠が必要な気がしてきたのは気のせいかな？

「例えば、兄さんが病気や怪我をしたときは私達補欠の出番です！腕の見せ所です！」

おお……………なんかすごく分かりやすい説明だ。こんなに筋が通っ

ている会話は久しぶりだ。なんだか続きに期待ができそうだ……！

「だから『家事・兄』となります。」

おととと、全く分からなくなったぞ？どうしてこうなった？

「えっ？結局のところ、普段の家事は俺ってことだよな？」

「そうなります。」

「なってたまるか！！今の会話に費やした時間を返せ！」

こうして延々と議論を交わした結果、サイクルになりました。

だから、最初に言ったじゃん……。。。

第四話 嵐の前の夕食

グツグツ・・・・・・・・トントン・・・・・・・・。

「あっ！違う！佳奈、それは後で使うからまだ入れないでいい！」

「えっ？そうなの？」

「それよりも、そっちの皮を全部剥いてくれ。」

「分かったわ。」

家事やその他もろもろの事がある程度決まった日から、数日が経った。

そして今俺は、夕食の準備を佳奈の手伝いという形で行っていた。つていうかほとんど俺がやってんだけどね。

「ねえ兄貴。」

「なんだ？」

「これ剥いても剥いても皮が出てくるんだけど、どっぴんぴんと？」

「は？何言ってるんだお前？」

剥いても剥いても皮が出てくる？なんだそれ？自己再生か？

「ほら、こんなに小さくなっちゃったんだけど。」

そう言ってる、佳奈が俺にあるものを見せてくる。

「ん………？」

振り返って佳奈のほうを見てみると。

「なんだこれ？にんにくか？」

そこには小さな三角っぽい形をした黄緑色の何かが転がっていた。

「いや、にんにくなんて俺買ってねえし………なんだこれ？」

「兄貴でも分かんないの？だったらこの野菜、不良品だったんじゃないの？」

「うーん不良品ねえ……………」

確かに何枚もの皮？を剥いて、現れた姿がこんなにんにくもどきだったのなら、不良品だったのかもしれない…………。でもそんな何枚も皮を剥く野菜なんて俺買ったっけ？

「ちなみに元はどんな形をしてたんだ？」

「なんか下のほうがこう丸みを帯びてて、どんぐりみたいな形してた。」

「むむむむ…」

「で、なんか上のほうがふさふさしてた。」

「ふさふさして……………」

おい・・・・・・・・それってまさか・・・・・・・・。

「もしかしてそれ、上のほうで緑色だった？」

「うん。」

「それどう考えても白菜ですよね！？剥いても剥いても剥いて剥くんじゃねーよー！！」

そして、この目の前に転がってる物体は確実に白菜の芯の部分ですよね！？

「へー・・・・・・・・。白菜って食べるとこあんなに少ないんだ。始めはあんなにおっきかったのに、剥き損だわ。」

「違う！もう何もかもが違う！！そして芯の部分はあんまり食べない！！！」

こいつ、本当に料理はダメだな！そして佳奈の陰に隠れて見えなかったけど、奥にあるあの山盛りになってる緑色の物体はどうみても白菜の葉だよな！？

「えっ？じゃあ白菜の食べる部分はいつどこへ行ってしまったのよ？」

「たった今、お前が箸り取っていったんだよ！！」

「もー！！うっさいわね！！あんたが剥けって言ったから剥いたのよー！！」

逆切れされてしまった。

「あー．．．．。分かった、分かった。俺の言い方が悪かった。あとのやつは全部これで剥いてくれ。これなら失敗はないから。」

そう言って、佳奈にピーラーを渡す。始めからこうしておけばよかった．．．．。

「何よこれ？」

「使ったことないか？こうするんだよ。」

そう言って俺は人参の皮を剥いてみせる。

「何よ、簡単に剥ける道具があるんじゃない。始めから貸しなさいよ。」

「あー、はいはい。早く全部剥いてくれ。」

そう言って作業に戻る。

早くしないと千夏達に怒られるぞ。白菜は味噌汁にでも入れよう……。

……十分後。

「よし、こんなもんかな。」

「ん…………。あら？難しいわね…………これ。」

下ごしらえを終えると、また佳奈が呟きだした。今度はなんだ？

「おいおい、ピーラー使って皮剥きが難しいなんてありえなああああああああ……！」

「何よ。うっさいわね。」

「どうしてそうなった！！」

なんと佳奈はピーラーで梅干の皮を剥いていた。正気の沙汰とは思えない……………。

「そしてこれを……………。」

全てを剥き終った佳奈はおもむろにその梅干を……………。

「待て！、一体何をする気だ……………！！？」

味噌汁の中に突っ込んだ。

「うわあああああああああああああああ。」

涙が止まらなかった。

~~~~~

「すっぱー！なんだ！？今日の味噌汁、白菜だらけの上にやけにすっぱいぞ！？どうなってんだ！？」

「気にするな……。ちよつとした……そう……  
・ちよつとした……。大失敗だ。」

「どつちなんだ！？兄ちゃん！？」

今度から佳奈は料理のサイクルから外そう……。

そう思って何気なく横を見ると……。

「むむむ……。」

愛菜が味噌汁とにらめっこしていた。

「どつしたんだ？無理して食べなくていいぞ。それは人間の食べ物じゃないからな。」



「ふん！どつせ私は料理が下手ですよ！」

いやいや、下手とか言う次元をはるかに凌駕してリミットブレイクしてますよ？佳奈さん。

「ううん……。佳奈お姉ちゃんが私達のために一生懸命作ってくれた料理を残すなんてできないよ。」

「愛菜……………」

うわああ、なんて思いやりのある子に育ってくれたんだ……………  
……。兄ちゃん嬉しいぞ。

「そうですね、どんなものでも残すことは良くないことですから。」

そう言いながら、愛菜の方を向いている千夏の空になった味噌汁の容器へ自分の味噌汁を移し変える雅。お前、最悪だな。

「雅姉ちゃん、いいこと言うじゃねーか。ズズズ。すっぱー！」

そしてまるで何事も無かったかのように味噌汁を飲む千夏。こいつは本当にバカだなあ。

「わ、私も！い、いただきます！！ズズツ！」

意を決したかのように勢いよく味噌汁を飲む愛菜。ほ、本当に大丈夫か！？

「ふう……………」

あれ？以外となんともない？どうやら無事……

「参りました。」

「じゃない！！すっかり錯乱してる！！味噌汁飲んで『参りました』は明らかにおかしい！！」

だから無理するなと言ったのに！！

「……………おいしい。」

「へっ??？」

今、ありえない言葉を聞いたような気がする。気のせいかな？

「……………この味噌汁……………おいしいよ？」

「お、お世辞なんていらないわよ！！」

「……………お世辞じゃない……………本当に……………おいしい。」

「優希……………」

「……………ちゃんと、お兄と……………佳奈の優しい味……………するよ？」

「あ、当たり前じゃない！！私が心を込めて作ったんだから、マズイわけがないじゃない！！！」

「……………うん。」

「あ……………ありがとう／＼／」

「……………うん。」

佳奈の料理のサイクルへの復帰……………確定だな。

「さーと、じゃあ片付けて、俺は真夜中テビでも見るかな!!」

「えっ!?!? 兄ちゃん、そんな夜中中起きてて、明日起きれるのか?」

「明日? 明日とか何かあったっけ?」

「何言ってるんだよ、明日から新学期。学校の始まりじゃん。」

「……………マジで?」

もうそんな時期でしたか……………。

## 第五話 登校日

今日は4月8日。今日から新学期が始まるんだが・・・。

「なー！兄ちゃん！私の体操服ってどこだー！？」

「だから、昨日言っただろ！お前の部屋の箆笥の上から2番目の左側だ！」

「か、佳奈お姉ちゃん！は、早くしないと遅刻しちゃうよ！」

「わかってる！もー！なんでこんなに髪がまとまんないのよー！！」

「優希！あなたなんで兄さんのTシャツ着て寝てたんですか！？そこんとこ詳しくー！」

「……………?」

俺達はなぜか朝から焦っていた。

「なんで、全員昨日のうちから準備してなかったんだ！？」

「「「「「兄さんに言われたくない!!」「「「「「

ぐぬぬ．．．．！確かに俺は今日が入学式だということすら知らなかったが．．．．．。そんなことは今はどうでもいい！

「とりあえず、早く全員準備しろ！その間に俺は朝飯を作っておくから！」

残された時間はあと二十分ぐらいか．．．。ギリギリだな。

「兄貴、私の助けが必要なんじゃないの!？」

「気持ちだけ受け取っておこう!!！」

「どづいつ意味よ!？」

「察しろ!!!！」

悪いが、今佳奈に手伝われたら何もかもが終わる!!!

「兄ちゃん！体操服あったぜ！！」

「そうか！それはよかった！」

「どうだ！似合ってるか！？」

「最高だぜ！ってなんで体操服着てんだよ！？制服はどうした！？」

「しまった！見つけた時ついテンションが上がって着ちまったぜ．．．」

「お前は本当にバカだな！！いいから早く着替えてこい！！」

そうして時間は過ぎていく．．．。間に合うのか．．．？

~~~~~

「はあ．．．はあ．．．」

「ここまで来れば、間に合うだろ．．．」

「まさか、入学式の日から走ることになるとは思いませんでした．．．」

俺もだ．．．。でもまあ、走ったおかげで遅刻することはなさそうだ。よかった．．．。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

背中におんぶした愛菜が心配そうな声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。もう下ろすぞ？」

「うん、ありがとう。お兄ちゃん！」

ここまで走ってくるのに流石に小学5年生になる愛菜をいっしょに走らせるわけにはいかない。ってことで俺がおんぶしながら走るこ
とになったわけだが．．．。

いくら愛菜が軽いからといってもそれなりの距離をおんぶしながら走るの
は流石につらい．．．。汗だくだ。

「……………お兄、お水。」

そう言って、優希がペットボトルを差し出してくる。

「ああ。ありがとうな。」

「……………ん。」

それにしても優希は汗一つかいてない。運動得意なのか…………？

「じゃんけん、ほい！はい、また私の勝ちね。千夏お姉ちゃんほら、がんばって！！」

「ちくしょー！！これで8連敗だー！」

後ろでは佳奈と千夏が荷物持ちをかけて盛大なバトルを繰り広げていた。つつか元気だな…………お前ら。

「それにしても、雅達の学校が全員夢ノ宮だったのは驚いたな。」

「そういえば、言ってませんでしたね。」

夢ノ宮学園。それが俺達が通っている学校だ。家から2キロ程離れたところがあり、超がつくマンモス校で、小学校から高校まで全てが広大な敷地の中に纏まって存在する。大学だけが離れた場所にある、いわゆる付属の学園なわけだが……。

「これも、母さんの計らいか？」

「はい。兄妹全員が同じ学校なら、心配も少なくてすむと言っていました。」

「なるほど。」

母さん、ああ見えて結構心配してくれてんだな……。今度何か送ってやるつか……。

「そして、『ぶっちゃんけ決めるの面倒だし』とも言っていました。」

「明らかにそつちが本音だな。」

腐った卵でも送ってやろう……。

「あの……。兄さん、夢ノ宮ってどんな学校ですか？」

「ん？……そうだな。一言で言うとかかなり自由だな。大体のこととは許される学校だよ。茶髪のやつもいるし、そんな厳しい校則も無いしな。」

「自由ですか……………」

「ああ、あとは生徒のほとんどが変人だらけってことかな。いや、生徒だけじゃなく先生もかな。とにかく変わった学校だけど、いいところだけ。」

「変人って……………兄さんよりもですか？」

「それはどういう意味かな？」

なんで俺が基準なんだよ。

「いや、兄さんみたいな人がそんなにいるなんて一般人の私に耐えられるか心配で……………」

「お前、兄ちゃんのこと嫌いなのか？ そうなのか？」

俺何かしたっけ……？

「でも……安心しました。」

「ん？」

「いえ、兄さんがそう言うのなら佳奈や優希たちも安心して学校に行けるでしょうから。」

後ろを向くと、愛菜と優希、千夏と佳奈がそれぞれ楽しそうに会話をしている姿が見えた。

「どういう意味だ？」

「別に深い意味は無いんですが……。ほら、私は高校入学という形ですが、佳奈や優希は編入という形になるじゃないですか。そこが少し心配だったんです。」

なるほどな……。学生にとって、転向というものは思いのほか

緊張するものだ。それが編入ともなると、なおさらだ。だけど・・・。

「大丈夫だろ。佳奈も優希も強い子だろ？」

「そうですね・・・。」

「それに、中等部には千夏もいるからな。あいつああ見えて人気あるんだぜ？いざとなったらきつと妹達を守ってくれるぞ。」

「そうですね！」

そう言って後ろの妹達を見渡すと・・・。

「うわー！！これで18連敗だー！私はもうだめだー！！」

千夏が叫んでいた。

ちよっと心配になった・・・。

第六話 悪友

「兄さん、私は少し準備があるので先に行きますね。」

校門が見えた辺りで突然、雅がそんなことを言い出した。

「ああ。また後でな。」

「はい。」

そう言って、走って校門のほうへ向かっていく。

「お兄ちゃん、私も行ってくるね。」

「おう、気をつけてな。」

そう言って、愛菜は校門のレンガ沿いに左方向へ歩いていった。

この学校は敷地がとても広いので、校門が何個も存在し、それぞれ高等部、中等部、初等部に隣接した門がある。別にどこからでも行けることは行けるのだが、大体はそれぞれに近いところを通る。

「兄ちゃん、私達も言ってくるぜ！」

「ここで千夏達とも別れる。」

「ああちゃんと佳奈と優希を案内してやれよ。」

「まかせとけって！」

「佳奈も優希もまあがんばれよ。」

「言われなくても大丈夫よ！」

「……………ん。」

そう言って、3人そろって走っていった。

「やれやれ……………ん？」

佳奈たちを見送っていると、千夏の鞆から何か白いものが落ちた。

「おい！千夏．．．行って行っちゃった。」

あいつ、鞆のチャック開けたまんまなの気付かなかったのか？ったく。

仕方なく、落ちたものを拾い上げる。なんだこれ？ハンカチか？

ぺろん。

「って！これパンツじゃねーか！！なんで鞆に入ってたんだよ!？」

これどーすりゃいいんだよ．．．。

「まあ．．．帰ってから渡すしかないか。」

そう思い、鞆の中にしまう。なんか落ちつかない．．．。

「お？和じゃねーか？久しぶり。」

そうこうしていると後ろから声をかけられた。この声は……。

「おう。良か。」

稲葉 良。身長は俺と同じぐらいの170ちょい。この学園でも二を争う変態だ。俺の数少ない悪友。説明終わり。

「お前、春休み何やってたんだよ？全然連絡つかねーし。」

「ああ……。ちょっといろいろあつてな。それよりもお前は何してたんだよ？」

「うん？俺か？いや……。ちょっと空を飛んでみたくて毎日座禅組んで気を溜めてた。」

相変わらず、スケールのでかい男だ。

「で、結果は？」

「ああ、10cmしか浮かなかった。つまらん。」

「えっ！？何？浮いたの！？マジで！？」

なにもんだこいつ！？

「そんなことよりお前に聞きたいことがある！あのカワイ子ちゃん
3人組は誰だ？」

「空飛んだのに興味は女子か……。3人組？なんだそれ？」

「しらばつくれるとはいいい度胸だな！お前と千夏ちゃんと愛菜ちゃん
の隣にいた3人の美人だよ！」

あー。雅達のことか。……どうするかな。本当のことを言っべ
きか……。

しかし、軽く『妹が5人に増えた』なんて言ったら女に飢えてるこ
いつは何をしでかすかわからない。ここは一つ試してみるか……。

「3人とも俺の彼女だと言ったら？」

「お前を殴り殺す。」

「3人とも俺の妹だと言っただら？」

「お前を刺し殺す。」

「3人ともそこでたまたま知り合った、何の関係もない女子と言っただら？」

「お前を蹴り殺す。」

「なんでだよ!？」

全部、俺が死んでるじゃねーか!？」

「うるせえ!なんでお前みたいなブサイクにそんなに女の子が寄ってくるんだよ!納得いかねえ!なんで俺の隣には女の子がいないんだ!毎日お祈りしてるのに!！」

「う、浮いてる!?!あまりの怒りに体が浮いてるぞ!?!と、とりあえず落ち着け!！」

「こいつ、本当に浮きやがった……。あの話は本当だったのか!？」

「で、結局どういう関係なんだよ!？」

「仕方ねーなあ……。。」

.....

「というわけだ。分かったか？」

俺は雅たちのことを超簡潔に説明した。

「ということだ。和にはもともと千夏ちゃん、愛菜ちゃんという超可愛い妹が二人いて、そこに新しく超可愛い妹が三人加わったと。お前はそう言うのか？」

「理解が早くて助かる。」

「死ね!」

「うおわぁ!危ねえ!」

こいつ！つまようじで腹を刺しにきやがった！なんて微妙な攻撃だ
。。。

「お前みたいなゲス野郎には俺が春休みに編み出した『真・つまよ
うじ殺法』で冥土送りにしてくれるわ！」

「お前．．．本当に春休み暇だったんだなあ．．．。」

ちよつと涙が出た．．．。今度遊んでやろう．．．。

「はっ！待てよ．．．!?!？」

「今度は何だ？」

「俺とお前は親友だよな？」

「は？．．．いきなりなんだ？．．．まあ友達ではあるか？」

空を飛ぶ友人．．．。不気味すぎる。

「つまり、親友の俺達はもはや兄弟も同然だよな!？」

「お前、一体春休みに何があつたんだ？バカに更なる磨きがかかつて、もはや手がつけられなくなってるぞ？」

前はここまでバカじゃなかったのに……。

「という事は、つまり……。」

あ、聞いてねーやこいつ。

「お前の妹は俺の妹!!」

「ジャ アンか、お前は!」

ダメだ。バカが移る。さっさと学校行こう。

~~~~~

良を置いて校門の前まで来てみると、二本の列ができていた。

「なんだ？」

「おい、どうした和？」

あつ、正気に戻ったのか。よかった。

「いや、何か列ができてんだよ、並ばないと入れなさそうだ。」

「列？ほんとだ。ちょっと見てみるわ。」

そういつて10cmほど浮いて辺りを見渡す良。便利だなその能力。

「ああ。あれは持ち物検査だな。」

「持ち物検査？」

「去年もやったじゃねえか。入学式の日に最初だけ。」

「ああ、そういえば……。」

やったような、やってないような……。

「でも、なんで最初だけやるんだ？意味あんのか？」

「そりゃあるだろ。最初にやるとけば、次いつあるかわからんから下手に物を持ってこれなくなるだろ？牽制と抑制という二重の効果があるんだよ。特に何も知らない1年生には効果抜群だろ。」

「誰だお前!？」

「良だよ!?!いきなり何言ってるんだ!?!」

こんな真面目なことを言う友人を俺は知らない。

「ちょっと!早く鞆出してよ。瀬川!」

良と話していると急に声をかけられた。どうやらいつものまにか、持ち物検査の順番が回ってきていたようだ。

「おっと、悪い。ってあれ?」



「何よ？」

「いや、俺ら初対面だよな？何で名前知ってるの？」

目の前にはふわふわの髪で、眼鏡をかけて、気の強そうなつり目をした女の子が立っていた。腕には風紀委員と書かれた腕章が巻かれている。もしかして俺の隠れファン？

「知ってるに決まってるでしょ。瀬川和樹、稲葉良、あなた達二人はこの学園の有名人なんだから。」

「えっ？俺も？」

後ろの良が反応する。こんなときだけ働く非常に都合のいい耳だ。授業は全く聞かないくせに……。

「えっ？何？俺達そんなに有名人なの？やだなあ、やっぱりこの溢れ出るカリスマは抑えきれてなかったか。仕方ないな。後ろの女の子達にサインをあげてこよう！！」

良は体中をくねくねさせながら、後ろの女の子達に近づいていった。

気持ち悪すぎる。見なかったことにしよう。

「でも、知らなかったな。俺達がそんなに人気あったなんて……」

これが噂のモテ期ってやつですか!?! ついに俺にも春が!?

「は? 何言ってるのあなた達? 私は確かに有名人とは言ったけど、人気があるとは一言も言っていないわよ?」

「は?」

えっ? どういうこと? ちょっとお兄さん意味がわからない。

「そりゃそうよ。なんたってあんた達が有名な理由は、去年、全学期全科目で補修を受けたという、今まで誰も成し遂げなかった快拳をやったのけたことだからね。」

「それは、つまり……。」

嫌な予感がプンプンしやがる。

「そ。悪評つてわけよ。ちなみについたあだ名が『補修キラー』、知らなかった？」

「知りたくなかった！そんな情報は知りたくなかった！」

なんて不名誉なあだ名だ！！ちなみに後ろのほうでは、バチーン！バチーン！と誰かの頬を思い切り叩いたような子気味良い音が鳴り響いていた。

## 第六話 悪友（後書き）

ついに新キャラが出てきました！！

しかし、書きたいことが多すぎて物語が全然進みません！ごめんなさい！

そしてキャラが早くも一人歩きし始めてしまいました。特に雅は一体どうなってしまったんだろうか……。構想ではしっかり者のはずだったのに！

遅くなりましたが、こんな小説かどうかにもよく分からないものに目を通して頂きありがとうございます！皆さんのおかげでこの小説、1週間で5000近いアクセスをいただきました！本当にありがとうございます！

さて、学園もついに始まり、新しいキャラもこれからどんどん出ていく予定です。

何かこうしてほしい、ここが見にくい等ありましたら、コメントお願いします。

意見、感想等ありましたら、気軽に書きこんで下さい。

それではまた次回。楽しんでいただけたら幸いです。

春夏秋冬

## 第七話 持ち物検査

「俺は何も言っていないのに、近づいただけで頬をメチャクチャ叩かれた……。あまりに一瞬の出来事で何がなんだか俺にはさっぱり……。」

両頬を2倍程に膨らませて、良は俺の後ろに戻ってきた。

「そうか、それは災難だったな……。」

でも、近づかれた女の子のぼうがよっぽど怖かっただろうな……。可哀想に……。トラウマにならないといいなあ。

「これで分かった？あんだ達の評判がいかに悪いかが。」

「ああ、かなりの予想外だ。」

「ま、あなたたち二人とは長い付き合いになりそうだし。私は今年から風紀委員長をやらせてもらう千葉香苗よ。よろしくね。」

「「謹んで、遠慮させていただきます。」」

「なんでよ!?!」

誰が好き好んで風紀委員なんかと仲良くなるか!自分から首を絞めに行くなんてDMか!

「ったく、まあいいわ。とりあえず鞆を出して。後ろがつつかえてるから。」

「ああ。」

半分はお前のせいだけだな、と思ったけどもちろん口には出さない。

「ほらよ、さっさと見て、通してくれ。」

そう言って、鞆を差し出す。今日は特になにも入れてないから大丈夫なはずだ。

「ノートに、筆箱、プリント……あら、何か意外と普通ね?」

「意外とってなんだ、意外とって。」

「いや、てつきり、いやらしい本とか入ってるのかと思ったけど。」

「俺は中学生か!？」

そんなもの、学校で見るか!そういうものは、家でじっくり見るもんだ!学校なんか持ってきたら動揺して落ち着いて見れねえだろ!?

「なあ!良?」

そう言つて後ろの悪友の方を向く。

「え?あ?な?何も無いよ?」

すげえ動揺していた。

「お前、まさか・・・?」

「な、何言つてんだよ和!去年、俺が学校にそんなもん持ってきたことが一度でもあったか!？」

「ちなみに、去年一年間で稲葉が没収されたいやらしい本は合計で365冊よ。」

「毎日じゃねえか！少しは懲りろ！」

しかもよく考えたら休みもあるから、ほとんど一日二冊じゃねえか！とんでもねえ奴だな！

「つーか、早くしてくれ。遅刻する。」

「誰のせいよ。誰の。まあいいわ、とりあえず変なものは入ってな  
- - - - -」

「なんだよ、どうした？いきなり止まって。」

鞆を整理していた千葉の動きが急に止まった。なんだ？トイレか？

「すみません、先生。お願いがあるんですけど・・・。」

千葉は鞆から顔を上げると、傍らに座っていた監視の先生に声をかけた。



「そうか！俺のあまりに素晴らしい鞆の中身に、おもわず俺が問題児ではないということを生に証明したくなっただな！よし、千葉とやら！思っ存分言ってやれ！」

「警察を大至急呼んでください！」

「うんうん！警察を呼ぶほど優秀な俺は………って警察！？」

え！？ナニナニ！？どういうこと！？一体どういうことですか！？千葉さん！？

「おい！いきなりなんてことを言いやがるんだ！お前は！」

「あんた、自分が何したか分かって言ってるの？」

「は？何言っただお前？」

全くワケが分からない……。何がどうなってるんだ？

「はあ……。自分で盗ってきたといったらばっくれるとは見下げた男ね。いいわ、見せてあげる。あんた……これは一体何!？」

そう言って、俺に見せてきたものは……真つ白なパンツだった。パンツ? ……パンツ。はっ!!

「しまったあ!!」

「しまった! ? 今あんた、しまったって言った! ? ほら見なさい! さあ白状してもらおうよ! これは一体どこで盗って来たパンツなの! ? 正直に吐きなさい! !」

「いや! これは違う! これは別に盗んだとかそういうものじゃない! !」

くそっ! 千夏が落としていったパンツのことをすっかり忘れていた! まさかこんなところで見つかるとは……!

「じゃあ! 一体なんだって言うのよ! !」

どうする? ここで下手に嘘をついても後々困ることになる……。ここは正直に言うしかねえか。

「違うんだ。聞いてくれ千葉。お前は誤解している……。」

「何を誤解してるって言うの……?」

「これは……妹のなんだ。」

「……………」

な、納得してくれたか?

「先生、刑務所の空きを確認してもらえますか?」

「刑務所!?おのれ!お前は警察に捜査すらさせないで、俺を直接刑務所にぶち込むつもりか!?!」

血も涙もない女だな!!

「あんだ、まさか他人のだけでは飽き足らず、まさか家族のパンツまで盗むなんて……。しかもそれを堂々と持ち物検査に出すなんて……噂以上の変態ね。」

「お前に言いたいことは髪の毛の数ほどあるが、とりあえず誤解だと再度言わせてもらおう!」

くっそっ! 一体どうしたらいいんだ! このままじゃ、生活指導室を飛び越えて刑務所行きは確定だ! それはいくらなんでも飛び越えすぎだろ!!

「ちょっと待ってもらおうか……。」

一体どうしたもんかと頭を抱えていたら、良がいきなりでしゃばってきた。何を言う気だこいつ?

「千葉、お前は和のことをよく知らずに、憶測で話を進めすぎている。」

「づづづ……。」

千葉が小さくうめく。ま、まさか良が俺を庇ってくれるなんて! 今日ほどお前の親友でよかったと思ったことはない!

「良……。」

「まかせろ。」

良が俺にだけ聞こえるように、小さく呟く。ああ……今お前は最高に輝いているよ。後は全てお前に任せよう！

「千葉、お前は疑問には思わないのか？」

「な、何をよ!?!」

「普通、人の下着等を盗んで鞆に入れたことを忘れると思うか？」

「うっ！それは確かに……。」

「そして、それを堂々と持ち物検査に出すやつがいると本当にお前は思っのか？」

「うっ……。」

あ、あの千葉が何も言えないなんて！すげえ……すげえよ良！

「で、でも、瀬川は実際妹のだって言ってたわ！」

「それは、こいつも気が動転していたんだらうよ。思わず妹のなんて嘘をついてしまったんだ。そうだろ和？」

「もちろんだ！」

もちろん嘘だけどね。

「じゃあ！他人でもなく、家族でもないとしたら、一体これは誰のなのよ!？」

確かに千葉の疑問は最もだ。実際妹のなんだしその可能性を自ら消した今、良のやつ、どうやって解決する気だ……?」

「分からないか？至極簡単なことじゃないか。他人でもない、家族でもない。そうなるとこの下着の本当の持ち主はズバリ……」

「ズバリ？」

「瀬川和樹本人のだ。」

「.....は？」

思わず、千葉とハモッてしまった。ちょっと待って混乱してます。  
ハイ。

「えっ？何？ちょっと待って！え？つまりどういこと？その下着は瀬川本人ので、いつもそついうのを穿いてるってこと？」

「その通りだ。」

「その通りじゃフガフゴフガ！」

反論を言いかけた俺は良に口を押さえつけられた。何しやがる！

「落ち着け、和。今はこうするしか方法はないんだ！」

良が耳元で囁いてくる。

「アホかお前は！いつもこんな穿いてるって周りに知られたら、俺はこれからこの学園でどつやって過ごしていけばいいんだよ！？」

「じゃあ、大人しくお縄につくか？」

「ぐっ……！」

くそお！史上最悪の二択だ！

「あ、あの……瀬川、今の話……本当なの？」

「……ハイ。」

終わった。俺の学園生活はここで幕を閉じた。

「そうなんだ……。あっ！ゴメンね？疑っちゃって……。瀬川がそんな趣味持つてるなんて知らなくて……。」

「ふぐうう……。」

涙が！止まらない……！







## 第八話 クラス分け

「おい、和。新しいクラス出てるみたいだぜ。行ってみようぜ。」

「あ？ああ．．．。」

校門をくぐって高等部校舎の方へ良と歩いていたら、何やら人ごみが見えてきた。

どうやら新しいクラスが貼り出されているようだ。しかし俺は今それどころではない。それどころではないんだ．．．！

「どうしたんだよ？和、さっきから変な顔して．．．。」

「黙れ！今俺は、校門での出来事をいかに広めないようにするか考えるのに忙しいんだ！」

あんな話、この変人が集まる学園のやつらが聞いたたら一瞬で面白いネタにされる！なんとしても広まる前に食止めねば！！

「無駄だと思うけどねえ．．．。っと、なんだ！？この人の量は！？」

和の声に反応して俺も前を向く。

「なんだ？つて、うおわぁ！」

そこにはクラス分けに群がる生徒が大量に存在していた。流石超マンモス校、生徒の数も半端じゃない！

「おいおい、こんなん待ってたら、日が暮れちまうぞ。」

確かに、これじゃあ待っている間にHRが始まっちまう。

「どつする？このままじゃ遅刻扱いになるぞ・・・？」

持ち物検査とかしてる場合じゃ無かったなあ。そう思いながら隣の良をみると・・・。

「ほっほっほ！まるの行く手を遮るとは片腹痛し！よかろう！ならば見せてくれよう！まるが春休みに会得した108の秘奥の一つ！禁断の呪文を！」

なぜか覚醒していた。

「なんだ？どうした？今の一瞬でお前の身に何があった？」

「フン！こんな人混み、この俺にかかれば余裕余裕！」

「コロコロキャラが変わるな。まあいいや。」

「ほほう。何やら自信満々じゃないか、稲葉君。」

「愚問だな！俺の天才的頭脳を持ってすれば解決できない問題など二つに一つだ！」

「いろいろとシッコミどころ満載だが、とりあえず考えを聞こうか。」

「うむ、心して聞くがいい。」

「了解。」

「いいか、あのクラス分けを見るのは実際一人でもいいんだ。一人が

両方のクラスを見れば問題ない。」

「なるほど、わざわざ二人で見に行く必要は無いというわけだな。」

「というわけで、まず二手に別れる。」

「ふむ。」

超珍しく、良がまじめに作戦を立てている。これは期待してもよさそうだ。

「そして、ここが重要なんだが、問題は『気をそらす』ということだ。これが成功すれば勝ったも同然だ！」

「気をそらす？」

「ああ、今俺達がクラス分けを見れないのは、大量の生徒がクラス分けの紙に殺到して隙間なく密集しているからだ。」

「なるほど、つまりその集中力をなんとかして緩和すれば、隙間が空いてそこに入り込めばクラス分けを簡単に見れるということだな。」

「その通りだ。」

おお、これは本当に利に適っている。もしかしたら良はアホにみえて実は切れ者だったりするのかもしれない。

「作戦はこうだ。俺がクラス分けを見に行く間、和は女子のスカートを捲くり続ける。分かったな！」

「全くもって意味不明だ!!」

やっぱり良はアホだった。

「待て、和。このスカートを捲くるといふのは、一見変態な行為に見えて実はそうじゃないんだ。」

「いや、どう考えても変態な行為だろ！」

「いいか、ここにいるのは高校生だ。」

俺の話の聞けよ。

「男子高校生という生き物はスカートが捲られたら必ずそっちに目が行く。っつーか行かないやつは男子じゃない！これは俺が保証する。つまり、この作戦は最も成功しやすい作戦なんだよ。それにこの人混みだ。誰が捲ったなんてわかりやしななさ。」

「うぬぬ……。」

無駄に納得してしまうところに腹が立つ。だがしかし！何を言われようと俺はスカートなんか捲らない！これ以上変な噂を増やしてたまるか！

「それに……。」

「それに、何だ？」

「入学式の日から遅刻したなんて言ったら、いい加減お前のおばさん帰ってくるだろ？」

「スカート捲りこそ我が悲願！！」

思わず承諾してしまった……。だがそれだけは駄目だ！それだ



けは！！

「よし、じゃあ俺が合図を送ったら捲りまくれ！行くぞ！」

そう言って、良が駆け出す。ああ！もう！なるようになれ！

.....

「どうだ！？見たか！？」

「ああ、バツチリだ。」

良の合図で始まった、『スカート捲ってクラス分けを見よう作戦』は無事に終了した。あんなに女子のスカートを捲くつたのは初めてだ。やけに白が多かった……。いや、なんでもない。

「じゃあ、早速教えてくれよ。どうだったんだ？」

「ああ、白が多かったな！」

ボゴオ！！

「オーケー！分かった！俺が悪かった！だからもう殴らないで下さい！！」

「次は殺す！」

「ちゃんとクラスも見ただってば、俺達いっしょのクラスだったぜ。8組だ。」

クラス見てなかったら、息の根を止めてるところだ。

「っとやべえ。チャイム鳴るぜ。早くクラスまで行かねえと。」

「そつだな、ここまできて遅刻はアホすぎるからな。」

そう言って俺達は足早に自分のクラスへと向かっていった。

変な噂流れてないといいなあ。

## 第九話 2年8組

「遅刻だな．．．。」

「ああ、完璧にな．．．。」

俺達は今、自分達の教室、すなわち2年8組の扉の前にいた。すでに中ではホームルームらしき話し声が聞こえる。

そう、俺達はあれだけ頑張ったのに遅刻したのだ。

「まさか中等部まで、行っちゃまうとはな．．．。」

「ああ、流石の俺もあれは予想外だった。」

理由はとても簡単。自分のクラスに向かう途中、とても可愛い中等部の子を見つけて、その子について良と熱いトークを交わしていたら、俺達まで中等部に行ってしまったというわけだ。どういうわけだ？

「まあいまさらそんなことはどうでもいい。問題はどっやってすんなりクラスに入るかだ。」

「あ？普通に謝って入れればいいんじゃないの？」

別にこれぐらいの遅刻大丈夫だろ・・・。

「ああ、和には言ってなかったな。」

「何がだ？」

「俺達の担任、般若だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・本気と書いてマジですか？」

「うむ。非常に遺憾ながらマジです。」

高橋香織、通称般若。この学校の高等部の女教師。生活指導も兼任する鬼。去年1年間で行われた悪逆非道の数々（主に俺と良に対して）は数え切れない。力が意味不明なぐらい強く、性格はこの世のものとは思えないほど凶暴。なんでこんな人外が教師になれたのかはもはやミステリーの域。この学校で遭遇したくないランキング？1だが、残念ながらなぜか俺と良はエンカウト率激高。完全に呪われているとしか思えない。ちなみに補習室でのエンカウト率1

00%。あの部屋にいただけで寿命が縮むと言われている。

「なんでお前言わなかったんだよ！」

「まさか本当に遅刻するとは思わなかったんだよ！」

くそう！女子中学生なんか追っかけてる場合じゃなかった！！

「で、どうする気だよ、良。」

「まあ、まかせろ。」

やけに自信满满だが、本当に大丈夫か？こいつのアイデアはいろいろ欠陥があるからな……。

「安心しろ、今回は一人ずつだ。」

「何が安心なのかさっぱりだが、とりあえず聞こう。」

まあ、このままじゃどっちみち両方おだぶつだ。それならこいつの考えにのったほうがいくらかマシか……。

「いいか？俺達が遅刻したという事実はもう覆しようがない。」

「ああ。そうだな。」

確かに遅刻したものを遅刻してないというのは正直厳しいだろう。．．。

「さらに、あの般若相手に素直に謝ったり、変に言い訳しても全く効果はない。特に俺達は。」

「よく分かってるじゃないか。」

普通のやつなら謝れば許してもらえるかもしれないが、去年教室よりも補習室にいるほうが長かったかもしれないと噂される俺達は、下手したら顔を合わせただけでぶっ飛ばされる可能性が十分にある。いや、マジで。

「じゃあ、どうするんだよ？」

「向こうから怒るのを諦めさせる。」

「は？」

何言っただこいつ？ついにボケたか？

「謝っても、言い訳しても、強行突破しても無理と分かってるなら相手から折れさせるしかないだろ？」

「まあ……でも、どうやって諦めさせるんだよ？」

正直あの人外を諦めさせるのは、良が彼女を作ることぐらい困難なコトのように思っけど。まあ簡単に言うとな不可能だろ。

「とりあえず意味不明なことを言いまくる。」

「その心は？」

「般若に『ああ、こいつはもうダメだ……ほっとこう。』と思わせる。」

「それはおそらく、クラスに入れる代わりに何か大切なものを失うよな？」

評判とか、クラスの仲間からの信用とか……。

「大丈夫だ。そんなものは元から無い。」

「ああ。」

そういえばそうでした。

「というわけだ。まあここは俺に任せろ。和は般若が怒る気を失ったときにゆっくり後から入ってくればいいさ。陰から俺の活躍を見てろよ。」

そう言つて、良が教室のドアに手をかける。いよいよ勝負の時だ。頼むぞ良。

ガラッ！！

「……………。」

クラス中の視線が良に刺さる。特に教壇に立つ般若のキレ顔はヤバ



イ。あれはモザイクが必要なレベルだ。大丈夫なのか・・・良？  
多分般若、お前が入ってきただけでキレたぞ・・・。

「何の謝罪もなく、いきなり入ってくるとは稲葉、いい度胸じゃないか。」

「先生、ボクとステイチューン？」

おお。いきなり意味不明すぎる。もはや会話が成立してないとか言う以前に、日本語になってない。俺だったらいきなりあんなこと言われたらぶん殴ってると思う。

「他に言うことは？」

「あつ！うそつ！？もう実力行使！？そんなバカな！？痛つ！あつ！ダメ無理無理！む・・・無念。」

パキ。

目にもとまらぬ般若のアイアンクローにつかまった良は子気味良い音をこめかみから発しながら一瞬で床に沈んだ。っておい！無念じやねーよ！俺、どうしたらいいんだよ！？

やっぱり、般若相手にこんな作戦じゃダメだったんだ！．．．よし、良とは別に来たことにして、素直に謝ろう。まだ俺がここにいることはばれて．．．．．

「おい、瀬川いるんだろ？入って来い。」

バレテラ。

おずおずと、教室に入る俺。まずい！このままじゃ死んでしまう！

「瀬川、何か言うことはあるか？」

落ち着け！考えろ！ここでの返答が唯一の助かる道！ここで選択肢を間違えたやつが死ぬんだ！俺はまだ死ねない！ならば、ここで言うべきことは一つ！

「先生、ボクとステイチューン？」

パキ。

非常に子気味良い音を聞きながら、薄れていく意識の中で俺はこん

なことを思っていた。

『良の言うことは二度と聞かん。』

そうして俺は意識を手放した。

## 第十話 迷子

般若に意識を刈り取られた後、目を覚ましてみるとすでにそこに般若はいなかった。どうやらHRは終わったらしい。

「はー、死ぬかと思った……。」

同じく死に目にあつた良が近づいてくる。若干こめかみが凹んでるところがなんとも言えない。

「これから一年間、あれが担任なんて俺達はどうやって生きていけばいいんだろうなあ……。」

「発想の転換が足りないぜ、和。こう考えれば問題ない。『わざわざ、補習室に行く手間が省ける』とな！」

すげえ！その発想はなかった！自ら死期を早める発想をするなんて本当にこの男の底がしれない！

「そんなことより、体育館へ移動だつてよ。」

「ああ。入学式か。めんどくせえなあ。」

まあ、気持ちは分かるが、そんなことも言ってもらえない。そうして俺達は教室を後にした。

~~~~~

教室を出た後、俺は一人で第一体育館を目指して渡り廊下を歩いていった。

えっ？さっきまで一緒だったこめかみが凹んだ男はどこに言ったの
かって？

ヤツなら『どうやら、身体を浄化する時間がやってきてしまったらしい。』とかなんとか言っただけに飛び込んでいったよ。何を言ってるか分からないと思うが安心してほしい。俺にもさっぱり分からない。

「さて、少し急ぐか……。」

あんまりゆっくりしていると入学式に間に合わないからな。そう思っ
って少し早足になる。

スタスタスタトコトコトコ。

「」。

スタスタスタトコトコトコ。

どうしたことだろう？足音が二つに聞こえるのは俺の気のせいだろうか？

スタスタスタトコトコトコ。

どうやら俺はいつの間にか雞見沢村に迷い込んでしまったらしい。た、祟りじゃ〜！オ シロ様の祟りじゃ〜！助けて圭一君！！

「お兄ちゃん。」

うわぁ！ついに幻聴まで聞こえてきてしまった！これはまさか妹達の怨念か！？心辺りがありすぎて最早どうすればいいか全く分からない！ってあれ？

「」

後ろを振り返った俺の視界に入ってきたのは、小学生ぐらいの背丈をした少女だった。なぜか俺のシャツの裾を掴んでいる。誰？

「……………お兄ちゃん。」

俺の顔を見上げて、再度呼びかけてくる少女。髪は両サイドで短く束ねられている。目はパツチリしていて将来美人になる予感をひしひしと感じさせる。どことなく普段の愛菜と似たような印象を受ける、大人しそうな少女だ。だが、そのパツチリオめめが今はなぜか濡れている。

「一体こんなところでどうしたんだ？」

とりあえず怖がらせないように情報収集に励もう。まずはそれからだ。

「お姉ちゃんが……………消えちゃった。」

うむ。全く話が見えない。むしろ混乱した。

「消えたって……………。はっ！君のお姉さんはもしかして忍者

なのかい!？」

ここは軽く冗談でも言っつて、気持ちを落ち着かせてやろつ。これが
高校生の余裕つてやつさ!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

思いつきり『聞く人を間違えた』つて顔をするのは止めてくれない
か。お兄さんもう立ち直れないよ?

「と、とりあえず、名前を聞いてもいいかな?」

「綾。佐倉綾。十歳。」

「綾か。可愛い名前だね。」

そう言つと。綾は嬉しそうに笑つてくれた。うん、やっぱり女の子
は笑つてたほうがいいな!十歳つてことは愛菜のひとつ下か?

「お兄ちゃんの名前は、瀬川和樹つて言つんだ。まあ好きに呼んで
くれていいよ。」

「うん！和樹お兄ちゃん！」

なんか間違ってる気がするがまあいいか。なんだか妹がもう一人増えた気分だ。

「それで、ここで何してたんだ？」

「えっとね、お姉ちゃんと体育館に行こうとしてたんだけど、途中でお姉ちゃんとはぐれちゃったの……。」

「はぐれた？それまたどうして？」

「なんかね、階段の上からいっぱい人が降りてきたの、その後はなんかもうこうワァってなっちゃって気がついたらお姉ちゃんとはぐれてたの……。」

なるほど、この学園は生徒数が多いからな、こういった移動の場合には気をつけないと人波にのまれてしまう危険性が大いにある。

「あれ？じゃあ直接体育館に行ったらよかったじゃないか。お姉ちゃんも多分そこにいるだろ？」

小学4年生なら一人で行けるだろうに。

「わ、私、この学園に来るの初めてだから……………」

そう言って、綾は顔を伏せてしまった。なるほど転校生でしたか……………。

「そっか。それじゃ、兄ちゃんが連れてってやるよ。いっしょに行こう。」

「う、うん！」

顔を上げた綾はとても嬉しそうだった。ま、これも人助けってやつですか。

そう思い俺は綾と手をつなぎながら、体育館に向かっていった。

~~~~~

ざわざわ、がやがや……………。

「ふわ〜」。

第一体育館に着いた俺と綾は入り口で止まっていた。

「和樹お兄ちゃん！すごいね！遊園地みたい！」

綾は何やらテンションが高くなっている。まあそれも無理はないよな。この光景を見れば……。

そうやって顔を向けた先には、様々な制服を着た生徒で溢れかえっていた。

夢ノ宮名物、『小・中・高合同入学式』これはまあその名の通り、小学校、中学校、高校と全部いっしょに入学式を行うという馬鹿げた祭典みたいなものである。小学校から高校まで合わせた生徒の数は合わせて4000人を超える。この入学式は始業式も兼ねているのでその名の通り全校生徒が集まる。その会場となる第一体育館は夢ノ宮ドームと言われるほどバカでかい。何からなにまでスケールのでかい夢ノ宮ならではの入学式だ。

「さっ、俺達も中に入って、綾のお姉ちゃんを捜そうぜ。」

「うんー！」

そう言っつて、俺達は体育館に入ろうとした。

「おい、瀬川止まれ。」

そして、なぜか般若に捕まった。ってかおい！あんだどっから湧いて出た！？

「なんすか？先生、こっちは今忙しいんすよ。後にしてもらえますか？」

このなんにもしてないのに、こっちが悪いことをしたような空気になるのはどうにかなんないもんかね？

「その忙しいという意味は、その子の身体をクンカクンカして嘗め回すことに忙しいという意味でいいんだな？」

「よくねえよ！！誰だその変態！？先生なんてこと言っつてんですか！？」

ああ！！そんなこと言っつから、ほら周りの視線が痛い！みんな違っ

んだ！誤解だ！だからそんな白い目で見るのは止めてくれ！！

「これは別に私が思ったことじゃない。ついさっき、お前が小学生ぐらいの女の子と廊下で会い、その子を嘗め回すように見たあと、そのまま持ち帰りそうだという情報が入ったもんでな……。」

「駄目だ！先生そいつを早く眼科に連れて行ってください！そいつ、きつと目が腐ってます！」

ちくしょう！一体誰だ！そんな根も葉もない話を！よりによって般若に話すやつは！？

「ちなみに情報提供者は稲葉だ。」

「あんのやるおおおおお！！今すぐぶっ殺してやる！！」

あいつ！なんてことをしてくれてんだ！？おかげでこの有様だ！

「まあ、私も正直半信半疑だったんだが、そこにお前がその子を連れて現れるじゃないか。これは教師として捕まえるしかないだろう？」

「ち、違います！誤解です！そ、そうだ！綾に聞いて下さいよ！それで俺の無実が証明されるはずですよ！」

そうだ、ここにれっきとした証人がいるじゃないか。なんだ慌てることなかったじゃないか。

「綾ね、和樹お兄ちゃんに連れ去ってやるうかって言われたんだ！だから嬉しくていつしよに来たの！」

「言っていない！そんな危ない言葉は言っていないよ！綾さん！？」

連れてってやるとは言ったけど！連れ去ってやるとはお兄ちゃん言っていないよ！？そこ重要！間違えちゃダメ！！

「それに、和樹お兄ちゃんね！綾のこと可愛いつて言ってくれたあと、好きにしているかい？つて聞いてくれたんだよ！」

「あああああああああああ！！！」

それは全部名前のことだし！なんか微妙に捏造されてるし！一体俺はどうしたらいいんでしょうか！？

「瀬川……。お前は馬鹿でも人としてはそれなりに立派なやつだと思っていただがな……。」

ヤメテ！先生！そんな目でボクを見ないで！

「あ！綾！今ならまだ間に合う！訂正を……。」

そうだ！もう綾の弁明以外に俺の生き残る道は残ってない！勝利の女神よ！俺に力を！！

「あつ！お姉ちゃん！」

そう言って、綾は姉を見つけたのか、あっさりと俺の元から離れていった。冷たすぎやしませんかね？女神さん……。

「とりあえず、話は署で聞いっつ。」

「カツどんは出ますか？刑事さん……。」

「私の昼のパンでよければやろつ。」

その優しさが今はなぜか無償に悲しいです．．．先生。

そうして俺は今年初の補習室へ連れていかれた。そこはなぜか妙に寒かった．．．。





「よし、抜き打ちテストすんぞー。」

「「「「「！  
？  
！？」」「」「」

いきなり入ってきて発せられた般若の妄言にクラスメイト全員が発狂した。ってかどういふこと！？テストって何！？

「せ、先生！いきなりテストってどう言うことですか！？今日はもう解散のはずじゃ！？」

思わず立ち上がる男子生徒。

そくだ！いいぞ！もっと言ってやれ！名も知らぬクラスメイト君よ！

「あー田中よ。私もそのつもりだったんだが、気が変わった。」

「ちょ！ちょっと待って下さい！そんな理由でテストなんてしないで下さいよ！先生はいいかもしれないですけど、僕達生徒にとってテストって言葉は死と同義なんですよ！？」

おお！言ってることはちょっと大袈裟だが、般若相手にあそこまで言い切るとは．．．。田中とやら、やりおるのお。

「「そうだ！そうだ！こんなの横暴だ！」」

田中君の言葉を皮切りに、クラス中から反論の声が巻き起こる。この勢いならもしかしたらテスト無しの方角まで押し切れるかもしれない！ファイトだ田中君！

「まあ落ち着け、お前ら。このテストは中学生レベルのいわば超簡単な復習問題だ。そんなに時間はかからないさ。」

「それならなおさらやる必要なんてないですよ！中学生レベルの問題なんてこの皆なら瞬殺です！先生にそんなに僕達のレベルを低く見られていたなんて心外です！」

全くだ！一体般若は何を考えているんだか．．．。冗談はその存在だけにしてくれ。中学生レベルだと？そんなもん高2の俺達にとつては赤子の手を捻るも同然。俺達も舐められたもんだ．．．。

「私も初めはそう思ったさ。でも仕方ないんだよ。」

「何を言われても絶対テストなんて受けませんよ！その単語が出る

だけで僕の心臓は、まるで陸に打ち上げられた魚のように活動を弱めるんです！たまに止まってる気さえします！だから僕は抜き打ちテストなんて認めない！」

「そつだ！そつだ！」

「俺達を殺す気か！」

「早く、帰りたい！」

とりあえず、田中君は即病院に行ったほうがいいような気もするが、このクラスの団結力はどうやら石よりも硬いようだ。これなら何を言われても結束が揺らぐことはなさそうだな。ザマミ口般若め！

「このクラスには、稲葉と瀬川がいるんだ。」

「先生！早くテストを始めましょう！」

揺らぎまくりだった。

「って田中君！？いつたいいきなりどうしちゃったの！？今の般若の言葉のどこに君を突き動かす何かがあったのか俺には皆目見当もつかないんだが！？」

あれっ！？いつの間にか周りの皆も机の上に筆箱だけという臨戦態

勢に!?! 一体今の一瞬で何があったんだ!?!

くそっ! なんだか俺の知りえない水面下で激しくバカにされた気がしてならない! おいつ! 良! さっきから一言も話さず真面目に前だけ見てるけど、お前も何か言っただれ!

そう思い、一番前に座る良のほうを見る。

良は目を開けたまま寝ていた。もうお前帰れよ……。

「よーし、じゃあ始めるぞ。」

「チクシヨオオオ! こうなったら実力で全員見返してやる!」

そう言って結局俺はテストを受けだしたのだった。

~~~~~

「今日はなんだか散々だったな……。」

「あぁ……。」

学校をやっと終えた俺は良といっしょに帰っていた。ちなみにあの後、俺と良は仲良く二人で般若の愛の補習授業を1時間みっちり受けてきた。

「まさかの一桁を叩き出してしまうとは流石に予想外だった。」

俺は名前を書いたところまでは調子良かったのだが、その後どうしたのかはもう覚えてない。その結果が一桁だ。

「和はまだいいほうだ……。」

「そうだな……。」

「俺なんか-15点だぜ……。テストに-があるなんて初めて知ったよ。」

「そうか……。」

良はどうやら一人だけ別次元の解き方をしていたようだ。一体何て書いたらそんなことになるんだろうか……。

「それよりも、お前の新しい妹の一人って雅っていう名前？」

「ん？なんで知ってんだ？俺、名前言っただけ？」

そんな覚えはないけど。

「やっぱりそうか！今日の入学式で新入生代表の挨拶してたんだよ！」

「えッ！マジで!？」

これは驚いた。頭はよさそうだと思ってはいたが、まさか新入生代表とは……。

「頭も良くて、しかもかなりの美人、性格もよさそうだったし、お前の妹にはもったいなさすぎる！俺にくれ！」

「アホか！」

お前は雅の本性を知らないからそんなことが言えるんだ！

「分かった、交渉しよう。交換条件だ。お前には千夏ちゃんやるから、俺に愛菜ちゃんくれ。破格の条件だろう？」

「お前の日本語は高度すぎて、俺にはもうついていけない……。」

「こいつは本当に交渉の意味を知っているのだろうか……。」

「じゃあ今度お前ん家行っていい？新しい妹ちゃん達に会ってみたいし……。」

「あー。まあそれくらいならいいか。」

そう言つと、良は気持ち悪い踊りを踊りながら喜んでいた。ちょっと早まったような気がした。

「つともうこんな場所か。そんじゃな、和。また明日。」

「ああ。」

いつもの分かれ道になったところで良と別れる。

「今日一日いろんなことがありすぎて疲れた……。」

そう思いながら、俺は帰宅するのだった。

第十二話 妹論争 前編

「ふいー。気持ちいいー。」

入学式の次の日である土曜日、俺は朝から風呂に入っていた。というのも昨日は疲れてそのまま寝てしまい、風呂に入れなかったからだ。

そのため早く目が覚めてしまった。時刻はまだ朝の6時30分だ。

「たまには朝風呂もいいなー。」

そんな久々の爽やかな朝を満喫していたら、ドアの前に人影が現れた。誰だ？

「……………お兄、タオルここに置いとく。」

「ああ、優希か。ありがとうな。それに毎日お疲れさん。」

「……………ん。」

あ、あまりにもアツサリ入ってくるから、ついうつかり!じゃない
!なんで優希はいきなりタオル一枚で風呂に入ってきてるんだ!?

「ゆ、優希!いきなりどうしたんだ!?

「.....汗いっぱいいたから。」

「確かに!確かに理由はその通りかもしれないが!俺が聞きたいの
はそうじゃないんだ!」

「.....?」

ああ.....。ちよっとこの子もネジが何本か足りないのだろう
か?

「いいか、優希。そこに座って俺の話をよく聞くんだけ。」

「.....お兄、いい匂い。」

聞いてない!俺の話なんてこれっぽちも聞いてませんね!?!優希さ

ん！

「ダメだ！優希！それ以上近づいたら死んでしまうぞ！！（俺が）」

「……………ん。」

なんでそこでそんなにションボリした顔になるんだ！？なんか兄ちゃんがとっても悪いことしたみたいない気分になるじゃないか！

「……………お兄は…私のことキライ？」

「大好きだ！！」

「……………ん！」

あああああ！とっても良い笑顔で返された！でもそうじゃない！そうじゃないんだあ！さっきから抱きつかれるたびに何か柔らかいものがフニフニフニフニ……………！！

「……………お兄、鼻から血がいつぱいでてるよ？」

とりあえず優希と風呂を交代した俺はなぜか妹達に尋問を受けていた。

「朝っぱらから発情してんじゃないわよ！この変態！！」

「俺のせいなのか！？」

さっきから佳奈に罵倒され続けてるわけだが。なんか納得いかねえ
。。。。。

「兄ちゃん、そんなに妹の裸が見たかったのか？しょうがねえなあ
。。。。。」

「お前はとりあえず下を穿け！」

いつもいっつもパンツ一丁で歩き回ってんじゃないやねえよ。。。。。

「お、お兄ちゃんはお姉ちゃん達の裸になんて興味ないよ！」

末っ子の愛菜が反論をしてくれる。いつもすまないねえ。

「お兄ちゃんが興味あるのは、私だけだよ！」

「ダメだ！その一言はかなり危険だ！」

愛菜が暴走してる！こりゃマズイ！

あれ？なんか三人の目つきが非常に危険なものになったような？

「へえ……愛菜。なかなか面白いことを言ってくれますねえ。」

「兄貴が私に興味がない？愛菜、残念ながらそれは違うわ。兄貴は私に欲情する変態よ。」

「兄ちゃんは私にメロメロなのは間違いないぜ！愛菜はまだまだ小さいから分からないだけだ！」

いたるところからふざけた返答が返ってくる。こいつらには兄に対する敬意というものが絶望的に足りてないような気がする。

「そ、そんなことないよ！お兄ちゃんはかっこよくて、優しくて、私の自慢のお兄ちゃんだもん！それにお兄ちゃんは小学生にしか興

味ないもん！」

いいよ！愛菜！本当に君は妹の鏡だ！だが！最後の言葉だけは兄ちやん納得できない！

「フフ．．．。いいでしょう。そこまで言うのなら確かめてみましょう。兄さんが誰を一番好きなのかを！」

あれ？なんか議論が変な方向に向かっているような？

そうして、よく分からない対決は始まった。

第十三話 妹論争 後編

「『第一回誰が一番大好き選手権』始まり始まり。」

パチパチパチパチ。

風呂からあがった優希を交えて、よくわからない議論は始まった。朝っぱらから俺は一体何をやってるのだろう……。

「これから、全員に兄さんが自分を一番好きだという根拠を述べてもらいます。そして議論して、最後に兄さんに選ばれた人が優勝です。優勝した人は後日、兄さんを好きにできます。異論はありませんね？」

「『『異論ナシ』』』」

「ハイ！ハイ！異論あります！ありまくりです！」

いつのまにか俺が景品になってるぞ！？

「景品に発言権はありませんので黙ってて下さい。」

ひでえ…………。

「それじゃあ、早速いってみましようか。佳奈。」

「ええ。」

名前を呼ばれて立ち上がる佳奈。

「兄貴が私をす、好きな根拠は、一番最初に戸惑いもせず私の、その、は、裸を見たからよ！」

そう言って、自分が言ったことが恥ずかしかったのか顔を真っ赤にする佳奈。つかあれは事故だったっーの。

「裸を見られたから、ね。ちょっと理由としては弱いんじゃない？」

「佳奈も、まだまだだな！」

「……………甘い。」

「佳奈お姉ちゃん、あれは事故だよ。」

周りからは不評のようだ。

「な、何よ！それだけじゃないわよ！わ、私がいなくなったときも、兄貴がみ、みつ、みみみって言わせないでよ！！」

バキッ！

「痛った！？」

顔を真っ赤にした佳奈に突然殴られた。なぜ！？

「ふふん！そんな理由じゃ、好かれてる理由にはならないぜ！」

「あら、千夏はずいぶん自信ありそうね。じゃあ次、千夏いつてみましようか。」

「おつよ！」

そう言って勢いよく立ち上がる千夏。なんでこいつの服装はいつも

俺のTシャツにパンツだけなんだ？

「兄ちゃんとの繋がりには、母さんを抜いたら私が一番だからな！兄ちゃんのことならなんでも知ってるぜ！」

「……………長ければいいってもんじゃない。」

「……………」

優希の一言に千夏がたじろぐ。以外と優希はストレートにものを言うんだなあ。

「言ってくれるじゃねえか。じゃあとおきの秘話を話してやるぜ。」

こいつ……………一体何を言う気だ？

「昨日兄ちゃんは…………私のパンツを学校に持っていった。」

「ぶぶおッ……！」

思わず飲んでいたお茶を噴出してしまった。こいつはいきなり何を言ってるんだ!?

「聞いたぜ兄ちゃん。昨日兄ちゃんは持ち物検査があつたのにそれを振り切つてまで、私のパンツを守りきつてくれたんだつてな。」

「アホか!そんなわけあるか!あれはお前が落としたんだろ!？」

それよりも、その噂どこまで広まつてんの!?!俺の評判は大丈夫なのか!?

「その時私は確信したね。ああ、愛されてるんだなあつて。」

「とりあえず、お前は病院行つて頭の中をよく見てもらつてこい!」

どんな思考回路してんだこいつは!

「うーん、ちょっと信憑性に欠けますねえ。」

「でもその話、中等部で大人気みたいよ?変態現るつて。」

「……………お兄はパンツ好き？」

「お、お兄ちゃんはそんなことしないよ！」

あああ……………。なんかもういろいろ取り返しのつかないようになるとなってる気がする。

「フフ……………。じゃあ次は私の根拠の話をしましょうか。」

そう言っつて雅が立つ。もうなんか嫌な予感しかない。

「兄さんの部屋の本棚の一番下の段の右から4番目の辞書の中身。」

「うわあああああああああああああ！」

「……………な！何！？」「……………」

千夏、佳奈、優希、愛菜が俺の突然の叫び声に驚きの声をあげる。でも！今はそんなことはどうでもいいんだ！なんで雅がアレの場所を！？

「フフ．．．。あの本に出てくる女の子、私にそっくりでしたね。しかもタイトルが『妹パラダイス』なんて、兄さんも物好きですね。」

「もういつそのこと．．．殺して下さい!!」

あの場所なら絶対見つからないと思ったのに! ってかなんで雅は俺の部屋に勝手に入ってんだよ! この外道! 悪魔! 兄殺し!

「フフフ．．．。大丈夫ですよ。兄さん。あの本以外のアレ系の本は全部燃やしておきましたから。ベッドの下のも、引き出しの奥の奥のやつも。」

パタッ。

「お、お兄ちゃん! ? どうしよう! お兄ちゃんが息してないよお!」

愛菜．．．兄ちゃんは今もうダメだ。後は頼んだぞ．．．。

「じゃあ次、優希いきましようか。」

俺をこんな目に合わせた張本人は軽くスルーですか。そうですか。

「……………」

小さく頷いて、椅子から立つ優希。もう早く終わらねえかなあコレ。

「……………お兄が大好きって言ってくれた。」

そう言って、少し恥ずかしそうにする優希。普段あまり表情を変えない優希だけに、こういう表情は新鮮ですごく可愛い。

「兄さん？」

「兄ちゃん？」

「兄貴？」

「お兄ちゃん？」

残りの4人はナマハゲみたいな表情をしていた。全然可愛くねえ。あつ、ヤバイ喰われる。本気でそう思った。

「じゃあ、最後は愛菜ね。」

俺はなぜか4人全員に大好きと言われた。心がこもってないとか散々文句を言われながら。これはあれか？新手的イジメか？母さん僕は今、妹達に苛められています。

「お姉ちゃん達はダメダメだよ。」

若干マイワールドに引きこもりになりそうな俺をよそに議論は続く。ついに最後のトリ、愛菜が立ち上がった。もう矢うものは何も無い！ドンと来い！

「私はね、知ってるんだよ。お兄ちゃんが小学生に興味津々なことを！」

どうやらまだこの子は俺を苛める気満々らしい。

「ま、愛菜さん？そ、それは何を根拠に言っているのかな？」

「景品は黙ってて！！！」

「……………ハイ。」

ついに、お兄ちゃんから景品に格下げされたようだ。泣きそつだ。

「入学式が終わったあとに、初等部でお兄ちゃんの名前がなぜか広まっていたの。」

「えっ？なぜ？」

初等部でなんで俺の名前が広まるんだ？

「私もね、なんでお兄ちゃんの名前を皆が知ってるのかわからなかったの。もしかしたらお兄ちゃんがかっこいいから小学生の皆知ってるのかなって思ったんだけど……。」

「それはないわ」「」

おい、優希以外の三人それはどういう意味だ？

「そしたらね、良君が私のところに来てこう言ったの『和が小学4年生の女子を連れ去った。愛菜ちゃんも気をつけてね』って」

「兄ちゃん！？鉄バットなんか持ってどこいくんだ!？」

千夏がなんか言ってるが気にしない。全ての元凶はどうかやら身近にいたようだ。

「その時に私は確信したの。お兄ちゃんは小学生が好き」私のことが好きって」

「もつどこからつっこんでいいのか俺にはわからんよ……………」

「なるほど。これで、全員ですね。なかなか甲乙つけがたい議論となりましたね。」

「どこがだ！？俺が苛められただけじゃねえか！！」

「で、結局のところ兄さんは誰が一番好みなんですか？」

雅のその一言に残りの4人が反応する。こいつらは実の兄に何を期待しているんだ……………」

「……………別に誰でもねえよ。」

俺の言葉にあからさまにションボリする愛菜と優希。なぜか怒り顔の千夏と佳奈。雅は……ニヤニヤ笑ってやがる。うぜえ！

「あー。なんだ。その、俺はお前らの中で誰か一人だけ好きになることなんてねえよ。比べることもしねえ。お前ら五人は、その、あれだ。俺の大事な妹だからな。」

恥ずかしくて最後のほうはゴニョゴニョとしか言えなかった。ってかなんで俺がこんなこと言わなきゃならんだ！

何か文句を言ってやるうと妹達のほうを向く。

すると、なぜかはわからないが、妹達は全員嬉しそうな顔をしていた。

「ま、いいか。」

たったこれだけの言葉で喜んでもらえるのなら、これくらい安いものなのかもしれない。

「よかったですね。千夏、佳奈、優希、愛菜。」

「なんか照れるぜ！」

「わ、私は嬉しくなんかないわよ！」

「……………嬉しい。」

「お兄ちゃん、大好き！」

それぞれの言葉が返ってくる。やっぱりちょっとむずがゆいなあ。

「それでは、兄さん。後日、兄さんを好きにできる権利は全員が手にしたということをお忘れなくくださいね？」

「えっ？」

驚きのあまり変な言葉がでた。

「……………やったー！！」「……………」

後ろでは四人が歓声をあげて喜んでいた。

ああ。ホント朝から何やってんだろうなあとつくづく思った土曜の朝だった……………。

第十四話 部活見学 1

キーンコーンカーンコーン。

「む、時間か。それじゃあ、今日はここまで。」

入学式から数日が経ち、俺は普通に授業を受けていた。ちなみに今受けていたのは般若の日本史の授業だ。つまらなさすぎてほとんど寝てたが……………。

「連絡事項は特に無し。私の授業を爆睡していた稲葉はこの後補習室に来い。以上。」

6時間目の般若の授業が終わり、そのまま帰りのHRに入る。そして約一名を除いて解散となる。

「ウェイ！ウェイ！ちょっと待って下さい！先生！なんで俺だけ補習室なんですか！？」

「黙れ！毎回毎回、目を開けたまま寝やがって！キモいんだよ！そんなお前に、もう一度補習室で今日の授業をやってやるつと言っんだ！ありがたく思え！」

おお。目を開けたまま寝れる良の睡眠を見抜くとは流石般若だ。

「ぬぐぐ．．．．．！で、でも！寝てるやつなら他にもたくさんいたはずですよ！瀬川とか！和とか！和樹とか！」

「それは全部俺だ！！」

しまった！思わず叫んでしまった！俺まで巻き添えを食ってしまう！

「まあ、6時間目だから多少眠くなるのは仕方ないと私も思っている。ある程度は許容範囲内だ。」

た、助かった！今日の般若は心が広いようだ。

「じゃあ俺だつて．．．．．！」

「お前は朝から寝てただろうが！！」

良のやつ、どうにかして俺を巻き添えにしたいらしい。観念して早く愛の補習授業を受けて、男らしく散ってこい！

「それじゃあ、最後にこれだけ聞いてもらえますか。先生……」

「諦める、稲葉。私は教師なんだ。一生徒の一言で決定したことを覆すことはない。今回補習室に行くのはお前だけだ。」

おお！初めて般若がちゃんとした教師に見える！そうだよな、教師が指導面で私情をはさむなんてあってはならないことだよな。般若、今だけはアンタ、教師の鑑だよ……。

「和は先生の授業の直前いつも、『あつ！次、昼寝の時間だ。ラッキー！』って言ってますよ？」

「瀬川、お前も補習室に来い！」

「せんせー……い！！」

私情はさみまくりだった。

そうして俺と良は補習室に連行されるのだった。理不尽すぎる……

~~~~~

「ったく、お前らはどうしてそう落ち着きがないんだ。」

「ハイ……。スンマセン。」

補習室に連行された俺と良は、15分ほどの説教を受けていた。流石に般若ももう一度、今日の授業をやるほど暇ではないらしい。

「どうせ、お前らに授業しても時間の無駄になるだけだからな。」

暇では……ないらしい!!

「今日はこれから会議があるからこれで開放してやるが……。お前らも馬鹿なことばっかやってないで部活でもやってみたらどうだ?」

そう言って、部活見学の紙を渡してくる。

「部活ねえ……。」

「まあ、無理にとは言わんが。見学ぐらい言ってみたらどうだ？」

「考えてみます。」

そう言っただけで俺と良は補習室を後にした。

~~~~~

夢ノ宮学園。全生徒数は4000人を超える超マンモス校。その夢ノ宮がほこる部活動も当然、並のものではない。個々の部活の力の入れ具合もそうだが、何より目を引くのがその数である。

普通の学園ならば、その数はせいぜい20ぐらいだろう。だがこの学園は違う。野球部といったメジャーな部活から爪切り部といった一体何を目指しているのか全くわからない部活まで、本当に多くの部活が存在する。

その総数なんと218。ホントこの学園はいろいろとおかしい。

そもそもなぜこんなに部活が存在するのかという最も大きな理由が、申請の楽さである。この学園の部活動は、活動内容と部員の名前を書けば即活動できる。人数制限は無いし、顧問の先生も決める必要

はない。

学生としてふさわしくない活動内容は流石に許可は下りないが、大抵のことは許される。あとは月一回の活動報告書をちゃんと提出しておけば正規の部活動として登録される。部活申請ができるのは高校からだが、小学生が活動に参加することもできる。

ざっと書いたが、要は大学のサークルみたいなものである。

そして、今は4月の半ば、部活勧誘、見学の時期真っ盛りである。まあ俺達は2年だが、そこはあまり関係ない。

「どつする？良？」

正直、俺は部活なんて入る気はない。そもそもそんな余裕はない。興味もない。恐らく、良も部活なんぞには興味はないだろう。そんなことをしてる暇があれば、かわいい女子を捜しに校内巡りをするやつだ。

そう思い、良の方を見る。

「ふっ！んふっ！ん〜ふっ！」

鼻息で紙がやぶけそうなほどガン見していた。顔がいろいろと大変なことになっている。

「え？何？お前なんでそんな興奮してんの？」

「よし！和、部活見学に行こう！」

会話が繋がらない。こいつは本当に人の話を聞かないやつだ。

「何？お前部活入るの？興味あったの？」

「部活には興味ないが、女の子には興味ある！」

なるほど、つまりこいつは、部活見学にかこつけて女の子とお近づきになるうと考えているわけだ。実に良らしい考えだ。

「まあ、いいか。」

「そうじゃなくっちゃ。」

まあ、軽い暇つぶしにはなるかもな。いや別に女の子とお近づきになりたいとかそんなことは決して思っていないが……。決して!!

そんなことを思いながら、俺と良は部活見学に行くのだった。

第十五話 部活見学 2

「で、どうする？どの部活から行く？」

部活見学に行くことになった俺と良は部活紹介のパンフを見ながら廊下を歩いていった。

「とりあえず、女子水泳部から……。」

「なあ。少しはその正直な感情を隠そうとは思わないのか？」

そもそもどうやって入る気だ？マネージャー志望とでも言う気がこいつは。

「つつても部活なんか入る気ねーしなあ…………。」

「もう最悪だな。お前。」

とても部活見学に行く人間の言葉とは思えない。

「とりあえず、真面目にやってそうな部活は止めとこうぜ。流石に

不謹慎だろ。」

「そうだな。」

真面目にやっている部にとっては、俺達みたいな入る気が全くない人間が来ても邪魔なだけだろう。もっとことう軽い感じのテキストにやっている部に行こう。

「となると、このページはダメだな。」

そう言つて、良は部活動紹介のパンフを捲る。今のページは野球部やサッカー部、バスケ部といったようなメジャーな部しか載っていない。次のページはどうだ？

『定規飛ばし部』 『空を飛部』 『ボ部』 ……。

「「ぶふおっ！」「」

あまりの斬新さに思わず吹いてしまった。

「なんじゃこりゃ ……？何する部活なんだ？」

「……ああ。全く内容がつかめない。」

いや、かろうじて定期飛ばし部は分かるが、なんだ空を飛部って……。この世には良みたいに飛べる人間が何人もいるのか？ボ部に至ってはもうワケが分からない。

「ん？」

「どうした？良？」

「なあ。これ行ってみねえ？」

良が指差した先にはこう書かれていた。『すぐに使える魔法部』

「うさんくせえ〜」。

魔法とかこの世にあるわけな……いや、実際、良は空飛んでるし、いや、でも……。

「いいじゃねえか！ほら！『透視とか出来ます』って書いてあるし
「！」

「それだな！？お前はその一言で決めたな！？」

「清清しいほどの変態だな！こいつは！」

「まあまあ、とりあえず動こうぜ！場所は……。」

そう言っただけで俺達は『すぐに使える魔法部』に行くことになった。ホントに大丈夫か……？

~~~~~

「ここか……。」

俺達は今、『すぐに使える魔法部』の部室の前に来ていた。

「それじゃあ早速入ろうぜ。失礼します。」

そう言っただけで、部室に入る。まあ、部室といっても空き教室だからそんなに物珍しいものでもないが。

「いらつしゃい。」

部屋の中には、一人の女子生徒がいた。髪は黒のロングで、目鼻立ちはかなり整っている。スタイルは出るところはしっかり出ていて、くびれるところはしっかりとくびれている。一言で言うと、かなり美人だ。物腰も落ち着いていて、大人のお姉さんって感じた。これはぜひお近づきになりたい！

出会いというのは第一印象がかなり重要だ。変態と思われぬように、言葉を選ばねば！

「スマセン。透視できるようになるって聞いて来たんですけど。」

もう最悪だよ！良君！？

「フフ……。もちろんできるよになるよ、瀬川和樹君。稲葉良君。」

「あれ？なんで俺達の名前を？」

「君達は有名人だからね。知らない生徒のほうが少ないんじゃないのかい？」

まさかまた、補習室関連のことだろうか？

「いや、違うんですよ、去年のアレは……。」

「去年？何を言っているんだい？君達は今年から有名人になったのではないのかな？」

あれ？今年？ってことはこの人は去年の俺達の黒歴史を知らないのか？

「君のことは特によく知っているぞ？瀬川和樹君。男でありながら、女物の下着を好んで使用し、その性癖は小学生にまで及ぶという真性の変態。学園では一見無害なように見えるが、実は重度のロリコンでシスコンだということが知られている。どうかな？」

「どうかな？じゃねえよ！何だその情報！？間違いにも程があるぞ！？誰から聞いたそんな噂！？」

「今や学園中の話題だが……。」

チッククショウ！どつりで最近クラスの女子の眼がやけに白いと思っ

た！まだ、そんな噂が流れているとは！

「ふむ。もしかして間違った噂なのかな？どうなんだい？稲葉良君。」

「いえ、本当です。」

「ぶっ飛ばすぞ！テメエ！！」

「いや、あながち間違ってもねえだろ？お前シスコンだし……  
ぶぶっ。」

こいつ、面白がってやがる！マジでぶっ飛ばしてやるうか！！

「稲葉君。笑っているが、君も負けず劣らず有名人だぞ？」

「へ？」

「稲葉良君。入学式の日、校門で、猥褻物陳列罪に問われるほどの顔で女生徒に近づき、『サインあげようか？』などと意味不明なことを言って、泣かせた挙句、全国初のマイナスという点数をテストで叩き出した猛者。今や学園の全女生徒から最要注意人物としてマ

「クされているとか何とか……。」

あっ、良が倒れた。どうやらショックすぎて気を失ったらしい。自業自得だ！馬鹿め！

「私の名前は月島葵だ。葵とでも呼んでくれ。2年4組だよ。よろしく。ちなみにこの部の部員は私だけしかない。私が部長だ。」

「はぁ……。」

どうやら同年だったようだ。年上かと思った。そんなことよりも……。

「おい、起きろ！良！さっさとここから出るぞ！」

「ふがッ！」

気絶している良を殴って起こす。これ以上この場所にいると心が折られかけない。早く出なければ……。

「おや、もう帰ってしまうのかい？魔法は必要ないのかな？」

「魔法なんてそんなものあるわけないだろ？」

いくらなんでも魔法なんて非科学的なものあるわけがない。

「フフ．．．。ミッ　ーマウスがプリントされた下着とは、なかなか可愛いものを穿いているじゃないか。」

「な!？」

思わず内股になってしまふ。ってかなんで!？なんで分かるの!？

「フフフ．．．。稲葉君はブリーフか。古風だね。」

そう言われた良のほうを見ると、同じように内股になっていた。ってかお前ブリーフって．．．。いや、いいんだけどさ。

「おい!和!」

「ああ!」

こいつはどつやらモノホンらしい。ホントこの学園の生徒は底が知れない。

「これは、いわゆる透視と言われるものだが、どつだい？覚えてみるかい？」

「「ぜひー!!」」

なんだか下心丸見えな気がするが、気にしない。

「そうか。この透視には少し注意事項があるが、大丈夫かな？」

「「大丈夫です!!」」

透視という秘奥の前には些細な注意事項など問題ナッシング！なんでもござれだ！

「まず、男子しか透けない。」

「「いらねえよー!!」」



なんだそれ！？使えないにもほどがあるだろ！！俺達の夢を返せ！！

「そうか……。結構便利なんだが……。」

なんだ！？お前は一体何にその力を使ってるんだ！？

「じゃあ、こんなのはどうかな？」

そう言って、葵はポケットから綿のようなものを取り出した。なんだ？

「まあ、見ていてくれ。」

そう言って、何やら手を前に出し、力を込め始める。すると……。

ふわっふわっ。

「「うおっ！浮いた！？」

そう、机の上に置かれた綿が急に浮いたのだ。スゲー！これは使え

るといろいろ便利かもしれない！

「どっ……はぁ……どうだ……はぁ……  
いた……はぁはぁ……か？」

えっ？なんでそんなに疲れてんの？

「ふう。どうだ？これを覚えてみる気はあるかい？」

「「ぜひ！！」」

これは使えると便利だろう！荷物とか気にならなくなるし……！

「ちなみに、これは0.3？以上のものは動かせない。無理に動かせば腕が折れる。しかも動かした後は以上に疲れる。どうだい？便利だろう？」

「「どこがだ！？」」

こいつの魔法マジ使えねえ！！

「そうか……. . . . . だったら次は……. . . . .」

「いや、もういい!!」

これ以上やっても使えるものがでてくるとは思えない。

「和、行こうぜ。」

良もなんだか疲れた顔をしている。一足早く教室の外に出てしまった。

「そういうわけだ。そろそろ俺達に行くよ。」

「そうかい。まあ気が向いたら、また来てくれ。」

「ああ。」

多分行かねえけど。

「それに、同じ2年だからね。また会うこともあるだろう。いや、

私はまた君と話がしてみたい。私から会いに行ってもいいかな？」

「ん、別に構わんよ。」

魔法うんぬんはともかく別に悪いやつではないみたいだし、以外と面白いやつみたいだしな。

「じゃ。」

「ああ。次に君に会えるのを楽しみにしてるよ。」

そう言われて、俺は教室を出た。

「なんかすごかったな。」

「ああ。」

教室の外にいた良と渡り廊下を歩く。

「さて、和。次はどこに行く？」

「えっ！？まだやんのか！？」

「ったりめえだろ！？まだ一つしか回ってねえじゃねえか！ほら行くぞ！」

そう言って、次の目標へと歩いていく良。

なんだか嫌な予感しかしないとある日の放課後だった。

第十六話 部活見学 3

「次はもっとマトモにテキストな部に行こう。」

「それは一体どんな部だ？」

『すぐに使える魔法部』を出た俺達は次にどの部の見学に行くか迷っていた。いや、正直俺はもう帰りたいんだけど……。

「和も何か探せよ。」

「何かねえ……。」

良に言われて、パンフを捲る。

『ねりけし部』 『メイド部』 『耳た部』 ……。

しかし、見れば見るほどふざけているとしか思えない部ばかりだ。なんだよ『耳た部』って……。

なあ、良。もう諦めて帰ろうぜ。そう言おうとして、良の方を見る

と・・・・・・・・。

「デユフフフフ・・・・・・・・！」

この世のものとは思えない顔をして笑っていた。ダメだ！良！その顔は人として許せる範囲を軽く越えてしまっている！その顔で外を歩いていたら間違いなく捕まる勢いだ！

「和！」

「うわぁ！やめる！その顔で近づくな！」

「何言ってるんだ？」

こいつ・・・・・・・・まさか無自覚か！？・・・・・・・・今度同じ顔をしたら鏡を見せてやろう。下手したら気絶するかもしれない・・・・・・・・。

「で？どうした？何か面白そうな部活あったか？」

「ああ！これ！これに行こうぜ！」

そう言っつて良がパンフのある部分を指差して見せてくる。

「どれどれ．．．。『美を追及する部』何だこれ？」

「説明書きを見てみる！」

そう言われて、部活名の下にある説明書きに目をやる。

そこにはこんな風に書かれていた。

【私達『美を追及する部』は美しくなることをモットーに活動をしています。自分を美しくするために、日々多くの仲間達と共に楽しく、厳しく鍛練に励んでいます。そして美とは、やはり見てもらわなければ意味はありません。なのでぜひこの機会に私達の美の追及のお手伝いをしてもらえないでしょうか？少し恥ずかしがりの子もいますが、あなたたちの目でその子の美しさを引き出してあげてください。あなたが来てくれることを心待ちにしています。

部長            姫野            薫】

「な！これは行くしかねえだろ！？」

「ほほう．．．。これはなかなかよさそうだな！」



これは女の子に期待できるかもしれない！なんせ美を追及してるんだ、美人じゃないわけがない！

「そうと決まれば善は急げだ！行こうぜ！」

「ああ！」

「美人な女の子……デュフフ！」

「その顔はやめろ！」

そんなことを言いながら、俺と良は『美を追及する部』の部室目指して走っていった。

~~~~~

結論から言おう。オカマの国がそこにはあった。

いや、俺ももう衝撃的すぎてなんも覚えちゃいないんだが、『美を追及する部』はオカマワールドだった。ムキムキマッチョなオカマに歓迎された。この世の終わりだと思った。

今思えばアレは完全に広告詐欺だったと思う。

良はあまりのショックに自我が崩壊しかけた拳句、呼び出しという恐ろしい現代魔法により再び補習室へ召喚されていた。あいつ死んだかもしれないなあ……。

「もう、帰ろう……。。」

良もいなくなったことだし、学校に残る意味もない。帰って夕飯の準備でもしよう。

そう思い、下駄箱を目指して歩きだす。今日の夕飯何にしようかな
……。

「おい。」

「ん?。」

何か後ろから呼ばれたような気がしたが、俺が呼ばれたのか?…ま
ったく、人を呼ぶときは、はっきり相手が分かるように声をかける
べきだということが分からんもんかね?

「そのロリコンかつシスコンで有名な瀬川和樹君、待ってくれ。」

「知らない！そんな変態を俺は知らない！」

いつの間に俺はそんな変態になってしまったんだ！？

「やあ。」

「あれ？葵？」

そこにはなぜか葵が立っていた。

「どうしたんだ？何か忘れ物でもあった？」

「いや、君がもう帰りそうだったので一緒にしようと思って。お邪魔だったかな？」

「いや、別にいいけど……。。なんで体操服なの？」

さっきまで制服を着ていた葵は今なぜか体操服だった。これでもかと自己主張する胸とすらりとのびた足が非常にけしからん！まっことけしからん！

「こっちのほう君の好みかと思ってね。どうだい？グツとくるかい？」

「ハッ！何かと思えばそんなことか！浅はかなり！」

まったく！世の中の女子は体操服を着れば男子が喜ぶとも思っているのだろうか？

「大丈夫かい？鼻血が尋常じゃないぐらい出てるようだけど……」

大正解だ！！

「いや、これは条件反射だ。勘違いするな。決して葵の体操服姿に欲情したわけじゃない。」

「君は体操服を見るだけで鼻血が出る体質なのか？それなら体育の時間は常に死と隣り合わせなんだな。これは皆に知らせる必要があるな。」

「スンマセン！葵の体操服姿に欲情しました！」

これ以上変な噂が広まる前に素直に謝つとこう……。

「フフ……。冗談だよ。さっき教室から出るとき、過ってコーヒーを零してしまってね。仕方なく、ということさ。」

「そうだったのか……。」

くそう！からかわれただけか俺は！

「それよりも瀬川君。」

「ああ、別に和樹でいいよ。俺も葵って呼んでるしな。」

「そうか、じゃあ和樹。そう呼ばせてもらおう。フフ……。男子を下の名前で呼ぶのは久しぶりだ。」

そういえば、俺も同学年の女子に下の名前で呼ばれるのは久しぶりだろうか……。

「それよりも、何か言いかけてなかったか？」

「いや、別に大したことではないんだが……。」

「なんだよ？ 気になるだろ？」

「チャック全開だぞ？」

「うほぁー!？」

「うわっ！マジで!?!いつから!?!いつから君は開いてたの!?!」

「なんでもっと早く言ってくれなかったんだ!?!」

「いや、あまりにも堂々としてたからってっきりそれが君のファッションなのかと。」

「んなわけあるかい!?!」

「大丈夫だ。もはやそんなことでは誰も驚かないよ。」

「それは一体どういう意味だ!？」

そんなことを言っていたら、いつの間にかグラウンドまで出てきていた。

「フフ……運動部の一生懸命な姿はいつ見ても気持ちがいいものだね。」

「ああ……。」

グラウンドでは、野球部やサッカー部、陸上部といった部活が活動していた。

「ん?あれは……。」

「どうした?和樹?」

「いや、なんでもない。」

「そうか……。ならば帰る。」

「そうだな。」

そうして、俺達は校門へと歩いていった。

「それにしても……なんであんなところに優希がいたんだ？」

「ん？何か言ったか？」

「んにや……。」

俺は、陸上部の練習を離れた場所から見ていた優希の姿を気にしつつ帰宅するのだった。

第十七話 優希の悩み

「兄貴、夕飯が出来たわ。そっちは準備できてる？」

「ああ！胃薬、頭痛薬、痛み止め、準備はバッチリだ！」

バリン！！

「何の準備をしているの？兄貴？」

「冗談だ。妹よ。」

佳奈のやつ、片手でガラスのコップを粉碎しやがった……。

「馬鹿なことやってないで早く料理運んでよ。」

「ハイハイ。」

時刻は午後の7時。今日の食事当番は佳奈だ。よし！胃薬の準備はバッチリだ！ドンと来い！

~~~~~

「……………」

全員が揃い、夕飯を食べ始めてから10分と経たないうちに優希が席を立った。

「あら？優希、まだ半分以上残ってるけどもういいの？」

「……………」

雅の問いに小さく答えて、優希は部屋に戻ってしまった。

「珍しいこともあるもんだなあ、優希がご飯残すなんて……………」

千夏が不思議そうに呟く。

実際、優希はご飯をよく食べる。あの小さい身体のどこに入っているのかと思うほど食べる。なので普段ご飯を残すことなんてほとんどないのだが……………」

「やはり、兄さんの対面の席というのがいけなかったのかしら？」

「ふざける。」

いかにも、俺の顔のせいで食欲無くしましたみたいな言い方はやめてもらおうか。

「「あるある。」

「ねーよー!」

「まったく、「こいつらはホントに俺のことを兄とってくれているのだろっか……………」。

「優希お姉ちゃん、どうしたのかな……………」

我が家の良心、愛菜が心配そうに俺のほうを向く。

「とりあえず、その話は飯食ってからにしようぜ。」

そう言っつて俺達は食事を再開した。

~~~~~

「では、聞きます。最近の優希の態度で何か気になることはありませんでしたか？」

夕飯を食べ終えた俺達は優希を除いた五人で円を描くようにソファに座っていた。

「ん、別に特に変わったことはなかったと思うけどなあ。」

千夏がせんべいをバリバリ食べながら言う。夕飯直後だということに
なぜ食っている？

「まあ、あの子はあんまり感情を表に出さない子だから、傍目からはわからないわよ。」

「そつだなあ。．．．。」

基本的に優希は自分の思っていることをそこまで表に出さない子だ

から、外見だけで何を思っているのかを判断するのは正直難しい。

「優希お姉ちゃん、ダイエットしてるのかな？」

「はっはっは。それはないな。俺の見たところダイエットが必要なのは優希じゃなくて佳なんでもない。」

危ない！佳奈の俺を見る目が非常に危ない！蛇に睨まれたカエルはこんな気分なのかもしれない！

「ねえ、佳奈。学校では何か変わったことはなかった？」

雅が佳奈の殺気を消してくれる。助かった……。

「兄貴、後で私の部屋に来てね。……そうねえ、学校ねえ……」

全然助かってなかった。一体俺は佳奈の部屋で何をされてしまうのだろうか……。

「別に普通だったよ？学校着いて、校門抜けて、友達に挨拶して……」

住奈が今朝の登校風景を思い出しながら呟く。まあ、学校では特に問題はなさそうだ。

「……下駄箱からラブレターが50枚ぐらい出てきて、クラスに行ったわ。ね？普通でしょ？」

「待て。」

今、非常に聞き流してはいけない一文が混ざっていたような気がしたが？

「そうね。普通ね。」

「普通だなあ。」

「普通だね。」

あれあれあれ？これは一体どうしたことだ？今のは俺の聞き間違いか？

「すまん、佳奈。もう一度今のところ詳しく。」

「だから、校門抜けて、友達と会って、ラブレターが下駄箱から湧き出てきて、クラスに行っただけよ。普通でしょ?」

「おかしい!明らかにおかしいところがあります!!」

「ラブレターって何!?50枚って何ですか!?

「兄ちゃん、何をそんなに慌ててるんだ?」

「いや、だってラブレターだぞ!?優希が50枚ものラブレターをもらってるんだぞ!?!」

「何を言ってるんですか兄さん?ラブレターの100枚や200枚
日常茶飯事でしょう?」

「んなアホな!?!」

何?こいつらそんなにモテモテなの!?俺には一枚も来ないのに!?

「まあ、そんなに貰っても困るだけですけどね。」

「うんうん。」

全国の女子生徒が聞いたら八つ裂きにされそうなことを簡単に言いますね雅さん……。

「そうか、いやしかしラブレターの100枚や200枚なんて返事をするのが大変そうだな……。」

「いいえ、返事はしません。そんなことしてたらそれだけで一日が終わってしまいますからね。」

「えっ？じゃあ読まずに捨てるのか？」

まあ、仕方ないとは言え少し可愛いそうだなあ。

「兄さんは本当に失礼ですね。捨てるなんてするわけないじゃないですか。」

「ああ、すまん……。」

そうだよな、いくらなんでも捨てるなんてするわけないよな。

「ちゃんと他の下駄箱に入れます。」

「もつと駄目だ!!」

そんなことしたら大パニック間違いなしだ!

「お前!自分がもらったラブレターを他の女子の下駄箱に入れるなんて何考えてんだ!？」

「む!止めてください。いくらなんでも自分に来たラブレターを他の女子の下駄箱なんかにはいれませんか!それは人間的に間違ってます!」

「あ、ああ。そうか、誤解してスマン。」

なんだ、ちゃんと判ってるじゃないか。ってことはとりあえず、空いている下駄箱に一時置いておくということか。うん、それなら問題ないな。

「ちゃんと男子の下駄箱に入れます！」

「悪魔かお前は！！」

男子からのラブレターを男子の下駄箱に入れることの危険性をこいつは何にも判っちゃいない！

「はっ！まさか愛菜も！？」

「わ、私はそんなに貰ってないよお！」

しかし、貰っているということか！？

「だ、大丈夫だよ、お兄ちゃん！愛菜はちゃんとお返事してるし、お兄ちゃんと両思いだったこともバツチリ伝えてるから！」

「それは恐らく全然大丈夫じゃないなあ！」

ただでさえロリコン疑惑がでてるのに、疑惑がとれて真性のロリコンになってしまう！

「兄ちゃん、話がそれてるぞ?」

「おっと、そうだな。」

今はラブレターの話をしてる場合じゃない。しかしとなると一体・
。。。

あっ! そういえば。。。。。

「なあ、佳奈。」

「ん? 何?」

せんべいを食べるか悩んでいた佳奈に話かける。食ったら太るぞ?

「優希ってさ、前の学校で部活とかやってたのか?」

「部活? ううん、やってないけど?」

「前の学校では部活はあまり盛んではなかったですし、それに祖父が恐らく許してくれなかったでしょうから。。。。。」

「そうか……………」

雅が言いづらそうに言葉を切る。

「それがどうかしましたか？」

「いや……………なあ皆、今からちょっと優希と話してきていいか？」

もしかしたらアレと関係があるかもしれない……………。

「何か思い当たることがあるんですね？」

「ま、兄ちゃんに任すぜ。」

「妹を守るのは兄貴の仕事でしょ！」

「頑張つて！お兄ちゃん！」

そう言って、優希は座布団を渡してくる。それにしても……。

「可愛い部屋だな。」

優希の部屋は俺の予想とは少し違っていた。ベッドにはぬいぐるみが置いてあるし、部屋は薄めのピンクカラーで統一されている。クールな外見とは裏腹に可愛い系が好きみたいだ。

「……………ん。」

優希はちょっと恥ずかしそうだ。そんなところも可愛いなあ。

と、思っていたらいつの間にか優希が俺の膝上に乗ってきていた。

「なあ優希。」

「……………?」

「何か、悩んでることがあるんじゃないか?」

俺のその一言に優希の身体がぴくっと反応する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何もない。」

すげー棒読みだった。どうやら優希は嘘をつくのが苦手らしい。

「優希はさ、兄ちゃんのこと嫌いか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そんなことない！大好き！」

おおぅ、そこまで力強く言われるとは思ってませんでした。

「だったらもうちょっと兄ちゃんに甘えてほしいなあ。優希はあんまり兄ちゃんのこと頼ってくれないから、ちょっと兄ちゃん寂しいなあ。」

まあ、これは優希に限ったことではないが、ウチの妹達は千夏以外俺にあまり物をねだったり頼みごとをしたりしない。千夏は容赦ないのだが。兄としてはもう少し頼ってほしいもんだ。

「な？優希。俺達は兄妹なんだぜ？悩んだときは兄ちゃんに任せろ

「！」

「……………ん。」

そう言うと、優希は嬉しそうに笑ってくれた。

「よし！じゃあもう一度聞こう。優希は何を悩んでるんだ？」

そう言うと優希はためらいがちにも、しかし今度ははっきりと悩みを口に出してくれた。

「……………お兄、私……………陸上部に入りたい。」

やっぱりな。俺は心の中でそう思った。この前グラウンドで葵といっしょに帰ったときに優希を見かけてから、そうじゃないかと思っていたところだ。

「うん。いいじゃないか。優希は走るの好きだからな！」

「……………いいの？」

はて？俺がそれくらいで駄目と言うと思われてたんだろっか？ちょっとシヨックだ。

「駄目なわけないだろ？なんでもっと早く言わなかったんだ？」

「……………部活に入ると、家事が出来なくなるからお兄達に迷惑が掛かる……………」

うむ。本当に優希は優しい子だ。感動で兄ちゃん前が見えません！

「大丈夫だよ。家事なんて本当は俺一人でも十分できるぐらいなんだ。それよりも兄ちゃんに優希が好きなことをやってくれるほうが万倍嬉しいよ。」

それだけを言っ上を向く。今の台詞が恥ずかしくてつい顔をそらしてしまった。

「……………うん。ありがとう。」

そう言っ、優希は俺にきゅっときついてくる。うん、元気になったよっでなによりだ。

「これにて一件落着ですね。兄さん。」

「陸上部か！いいな！私も入ろうかな！」

「優希ったら、それくらい私に相談しなさいよね！」

「陸上部ってカッコイイね！優希お姉ちゃん！」

どじやら全員、話を聞いていたようだ。まったく……。

「ま、そういうことだ。よし、今日はもう遅い。自分の部屋へ帰った帰った。」

そう言くと、全員自分の部屋に戻っていく。今日も一日無事終わったようだ。

「さて、俺も寝るかな。」

そう言って、自分の部屋へ戻……。

「兄貴？後で私の部屋に来てって言ったわよね？」

れなかった。こいつすっかり覚えてやがった！！

「さっ！私の部屋でさっきの言葉の意味をじっくり聞かせてもらおうかしら。」

そうして俺は佳奈の部屋へ引きずり込まれていった。死んだ俺……。

第十八話 佐倉姉 前編

4月も終わりにさしかかり、新しいクラスであわただしかった教室の雰囲気もだいぶ薄れてきたこの季節、俺はあくびをしながら4時間目の授業を受けていた。

春の陽気に誘われてやってくる爽やかな風が更なる眠気を誘う。いつそのこと寝てしまいたいが、あいにく今の時間は般若の日本史の授業。寝たら命はない。

「しっかし、眠いな……………」

俺は小さな声で呟く。周りを見渡すと、他のクラスメイトもあくびをしたり、目をしばしばさせたりして非常に眠そうだった。

「これなら、良なんかひとたまりもないな……………」

一時間目だろうが六時間目だろうがそこに椅子と机があれば夢の世界へ旅立てる良にはこの好条件、寝ないはずがない。

そう思って良のほうを向く。

良はなぜか、椅子の上で縦横無尽に動きまわっていた。

「な、なんだ！？あいつは何やってんだ！？」

良の行動が意味不明すぎて混乱しそうになったが、もう一度よく良のほうを見てみると……………。

「あ、あいつ！寝てやがる！！」

さっきはあまりの衝撃に顔を見ていなかったが、もう一度よく見てみると確かに良は動き回りながらしっっかり寝ていた。

どうやら良は以前、般若に目を開けたまま寝ていることを見破られてから改良をほどこしたようだ。なるほど、ついには動きながら寝る術を身につけたか……………。お前はどんだけ寝たいんだ……………。

しかし流石！流石は良だ！！目の付け所が素晴らしい！だがおそろしくその動きは授業中に許された範囲を軽く超えてしまっているぞ！

「おい、稲葉……………」

「ふがつ？」

案の定、般若に頭を鷲掴みにされる良。ようやく起きやがったかあの野郎……………。

「稲葉、死ぬ前になにか言っときたいことはあるか？」

「や、やだなあ、先生。そんな怖い顔したらせつかくの鬼のような顔が閻魔大王にランクアップされちゃいますよ？」

メキッ！

般若の辞書のように厚い資料集のカドが良の顔面にめり込んだ。あれは痛い……………。

キンコーンカーンコーン。

「時間が……………。よし今日はここまで。」

そう言って、般若は教室を出て行った。

~~~~~

「つて。一体なんでばれたんだ？」

顔面が陥没した良が顔を抑えながら近づいてくる。むしろあの動きで最後まで般若が注意しなかったことが奇跡だがな……。

「おや？二人して何をそんな難しい顔をしてるんだい？」

「ん？葵じゃないか。」

「やあ、和樹。」

いつのまにか葵がそこに立っていた。いつからそこにいたんだ？

「あ？月島じゃねえか？こんなとこで何やってんだ？」

良がワントンポ遅く反応する。お前はとりあえずその顔の凹みを治せ。キモい！

「いや、よかつたらお昼をいっしょにどうかなと思ってね。」

「おっと、そういやもう昼だったな。」

良のせいですっかり忘れてた……………。

「そりゃいいけどさ。和、お前は今日昼飯無かつたろ？」

そうなのだ。いつもなら弁当なのだが、今日は千夏が寝坊したせいで昼飯がない。さてどうするか……………。

「なんだ？和樹、昼ご飯が無いなら私が魔法で出してやろうか？」

「え？そんなことできんの？」

「もちろんだ！私の魔法を舐めないでくれ！」

そう言って胸を張る葵。良はその張り出された胸を見て盛大に鼻血を吹いて倒れていた。すさまじい想像力だ。

「すげえな。ちなみにどんなのが出せるんだ？」



「1111の中から選んでくれ。」

そう言っつて葵が一枚の紙を渡してくる。

「どれどれ『遙かなる大地の恵みを受け、すくすくと育ち、一つ一つ丁寧にタネをとられたその味は格別である。』か。へえ美味そうだな。」

なにやらすぐく美味そうだった。これは何かのフルーツか？昼飯には少し合わないがこの際贅沢は言っつてられない。

「ああ。それは枝豆の盛り合わせだ。それにするか？」

「枝豆！？これ枝豆なの！？」

「そつだ。一粒一粒丁寧にタネを取り除かれた枝豆はさぞかし絶品だろつ？」

「バカタレ！！枝豆からタネを取り除いたら食べるとこねえだろ！？絶品もくそもあるか！」

なんだその無駄な作業は!?

「むう。そうか……………。だったらこれならどうだ?」

そう言つて葵がある部分を指で指し示す。

「つたく、次は『色とりどりの鮮やかな色をしており、食べるだけで楽しい気分になれる。眺めてよし、食べてよしな万能な一品。』……………おっ?これはなんだろう?」

鮮やかな色だから色つきソーメンとかか?あれは子供とか好きだな。そういうえば愛菜も昔嬉しそうに食べてたなあ。

「それはすごいで。食べるだけでなぜか笑いが止まらなくなったり、普段見えないものが見えるようになったりする優れものだ。」

「何?」

笑いが止まらなくなったり、見えないものが見えるようになる?そんなソーメン俺は知らないが……………?

「本当にすごいシイタケだ。」

「それは間違いなく毒キノコだな！？シイタケなわけあるか！しかも昼飯にシイタケってどんな光景だ！？シユールすぎるだろ！」

駄目だ！やっぱりコイツの魔法は当てにならない！

「オツケー、分かった。葵の魔法料理はまた今度にしよう。」

その時は良に食べさせよう……………。

「むう。そうか。それなら学食へ行かないか？私は恥ずかしながらまだ学食を使用したことがなくてね。一度行って見たかったんだ。」

「学食か……………。どうする良？」

「ん？いいんじゃない？別に。」

いつの間にか良が復活していた。

「よし。決まりだな。行こう。」

そうやって俺達は学食へ向かっていった。

第十九話 佐倉姉 中編

「ん？何だ？やけに騒がしいな。」

一番前にいた良が突然そんなことを呟く。ちなみに今、俺達3人は食堂の入り口に着いたばかりだ。

「どうした？良。早く入れよ。」

「ああ。」

そうやって、俺達3人は空いている席を探す。しかし混んでやがる……。

「なあ、和樹。なんかあの場所だけ妙に騒がしくないか？」

席に荷物を置きながら、葵がそんなことを言ってくる。

「騒がしい？」

そう言われて、俺も何の気なしにそっちを向く。俺の向いた先は生

徒が食券を厨房のおばちゃんに渡すところで、普段から騒がしいところなのだが、今日はなんだがいつも以上に騒がしかった。．．．  
．いや、騒がしいと言うより、混乱してるのか？

「おい、良。ちょっと見てこいよ。」

「んゝ無理、今俺は呼吸するのに忙しい。和が行け。」

ちっ！使えないやつだ！もうお前はそのまま窒息死してしまえ！

「お！あそこに田中がいるじゃねえか！あいつに聞こうぜ！」

そう言って良が指差した先にはクラスメイトの田中が食券を買っために券売機に並んでいた。

「いや、無理だろ。人が多すぎてとても田中の場所まで行けねえよ。よしんば行けたとしても話ができる状況じゃねえ。」

「ふむ。ならば私が召還魔法でその田中君を呼び出してやるつ。」

．．．．．また葵がワケ分からないことを言い出した。

「え？何？お前そんなことまでできんの？」

「まあ、見ている。いでよ！田中！」

ボンツ！

そう言つて超簡単そんな呪文？を唱えた葵の先には確かに田中が現れていた。………首から上だけ。

「ふう。成功して良かった……。」

「いやいや！360度どこからどう見ても大失敗だ！！大丈夫なのか！？田中あああ！！！」

「あれ？何で俺こんなところにいるんだ？ついさっきまで券売機の列に並んでたのに……。」

全然無事だった。生首のくせに普通に会話してきやがった……。

「ん？瀬川と稲葉じゃん。どうした……って！？アレ！？」

何これ！？俺一体どうしちゃったの！？いつの間にか身体がないんだけど！？」

あつ、マズイ。田中が正気を取り戻そうとしてる。何とかごまかせ！良！

「まあ、そんなに気にすんな。ちょっと時空の歪みに顔だけ巻き込まれただけだ。」

「えっ！？それって大丈夫なの！？」

恐らく全然大丈夫ではないな。

「大丈夫だ。その証拠にお前の身体は今もちゃんと券売機の列に並んでる。」

良にそう言われて、俺も券売機のほうを向く。そこには直立不動の体勢で券売機に並ぶ田中の身体があった。後ろの小学生の女の子が首なし田中を見て、今にも泣きそうな顔をしている。可哀想に……

「そんなことより一体何があったんだ？やけに騒がしいぞ？」



良が田中にとっての一大事をそんなことで片付けて強引に本題に入る。

「ああ。なんか食堂のおばちゃん全員が昨日『もうこんな忙しい仕事やってられるか!』って辞めちゃったらしいんだよ。」

「えっ?じゃあ今日は食堂使えないってことか?」

まいったなあ。弁当のない今日に限って食堂が使えないとは……。

「いや、それは大丈夫だ。学校側も対策したようで、なんかポランティアのじいさんばあさんが無償で手伝ってくれてんだ。」

「なんだ。それなら何も問題ないじゃないか。」

「いや、それが一つだけ問題があるんだ……。」

そう言って、田中は言いづらそうに目をそらす。生首なのでキモいことの上ない。

「あのじいさんばあさん、ボケてて注文したものと全く違うものが  
でてるんだ……。」

~~~~~

「なあ和樹……。」

「なんだ？葵。」

最後に食券を買って、昼食を手に自分の席に戻ってきた葵がボソリ
と呟く。なにやら随分と疲れた顔をしている。

「私は……確かに冷麺を注文したんだ。食券にも冷麺と書
いてあったし、口頭でもはっきりと『冷麺を下さい』と頼んだはず
なんだ……。」

「そうか……。」

そう言う葵の目の前には、熱そうに湯気を立てているどう見てもラ
ーメンにしか見えないものが置かれていた。

「これは私の目がおかしいのだろうか……？何度見返して

も私にはこれが冷麺には見えないんだが」

「安心しろ。それは間違いなくラーメンだ。」

そう言う俺の目の前には親子丼が置かれていた。もちろんそんなものは頼んでいない。あのじいさんばあさんワザとやってんじゃねえだろうな？

「和樹」

「どっした？」

「麺がそばなんだが」

「」

もっ何と言っていいかわからない。

「ま、まあいいじゃねえか！良に比べたらだいぶマシだ！」

そう言って良のほうを見る。

「……………これはカツ丼……………これはカツ丼……………」

良は何か不気味なことを言いながらししゃもを頬張っていた。どうやらこいつはカツ丼を頼んだら、大量のししゃもが出てきたみたいだ……………。ドンマイ……………。

「あれ？兄さんじゃないですか？」

何も知らない人が見たらお通夜かと思間違っほどのテンションで昼飯を食べている俺達に、誰かが声をかけてきた。

「あれ？雅じゃないか。お前もここで飯か？」

「ええ。今日はお弁当が無いですから……………そちらのかた達は兄さんのご友人ですか？」

そう言っつて、雅が良と葵を見る。そう言えば初対面だったな……………。

「紹介するよ。こっちが月島葵。友達だ。」

「初めましてかな？2年4組の月島葵だ。君のお兄さんにはいつもお世話になっているよ。主に身体のおちこちをね……………」
フ……………」

「こちらこそ初めまして。瀬川和樹の妹で1年1組の瀬川雅です。家ではいつも兄さんにもてあそばれています。」

ふふっ……………。こいつらが何を言っているのか俺にはさっぱりだ！！

「で、こっちが……………。誰だったかな？」

「良です！君の大親友の稲葉良です！！忘れないで下さい！！」

「冗談だよ。泣くな。こいつが稲葉良。千夏や愛菜も知ってる、まあ変態だ。」

「はい！稲葉良です！和の変態やらせてもらってます！彼女募集中です！」

駄目だ。なんかおかしくなってやがる。こいつを紹介したのは間違

いだったのかもしれない。

「ふふ。知ってますよ。稲葉良さん。私のクラスでも、女子の中で良さんにだけは近づくなという暗黙のルールがありますから。」

「おい、雅。それ以上良を追い込むな。」

良は声を押し殺して泣いていた。このままだといつは校舎の屋上から身を投げ出す勢いだ。

「おい、雅。行くよー。」

「あつ！すぐ行きます！」

俺と会話していた雅に友達と思われる女子生徒が声をかける。

「それじゃ兄さん。私は行きますね。」

「ああ。また家でな。」

「はい！………うと、そうだ。兄さん、今日学校が終わった

「家にいますか？」

友達の方へ行こうとした雅が急に振り向いてそんなことを言うてる。

「今日？多分家にいるけど？」

別に今日は買い物する予定も誰かと遊ぶ予定もない。それがどうしたんだ？

「よかった！私の友達で兄さんに会いたいって言う子がいるのですよ。今日学校が終わったらその子を家に連れてきますのでちゃんと家にいてくださいね！」

「え？何？つておい！雅！？」

それだけを言って、雅は友達と遠くへ行ってしまった。

「一体なんなんだ……？？」

まあいいか。考えてもどうせ分からないだろう。そう思って俺は良を慰めるのだった。

・
・
・
・
あつ。
駄目だ。
魂が抜けてる。

第二十話 佐倉姉 後編

「ただいま。うつへえ……………びしょ濡れだ。」

学校を終えた俺は雅に言われた通り、寄り道せずに直帰した。が、午後から降り出した雨のおかげでびしょ濡れだ。くそう！折り畳み傘を持っていくべきだった！

「とりあえずタオルタオルと……………」

そう言つて、風呂場兼洗面所へ急ぐ。いっそのことシャワー浴びてもいいなあ。

そんなことを思いながら、洗面所の扉を勢いよく開ける。

ガラッ！

「ふえ！？」

「あつ。何かデジャブ……………。じゃない！誰！？」

なぜか洗面所にはバスタオル一枚という、いつかの佳奈を思い出させる少女が立っていた。

オーケー、理解した。俺は今ものすごく危険な場面に遭遇しているようだ。例えるならば、ファミレスで腹一杯食った後の残金確認50円ザッツオール、携帯充電切れと言ったところか。うむ、ほぼ詰

「またですか？兄さん。」

「誤解をまねくような言い方は止めてもらおうか。」

「ち、違うの！雅ちゃん！悪いのは私なの！」

意識を回復した俺は、対面に雅とバスタオルちゃんの3人でソファに座っていた。．．．いや、もうバスタオルは制服に変わってるけど、名前知らないからとりあえずということだ。

「ふう．．．。もういいです。兄さんの驚くほど大胆な覗きは今に始まったことではないですから．．．。」

「その言い方では俺が常に覗きをしているように聞こえるんだが．．．．．？」

「．．．．．え？」

「オイ！なんで『何をいまさら．．．』みたいな顔してこっちを見るんだ！？」

「まったく！まあ今はそんなことは関係ない。それよりもこのバスタオルちゃんは何者だ？そう思ってバスタオルちゃんの顔を見る。」

「は、はうう．．．／／／」

赤面されてしまった。

「ほら、詩織。赤くなっても始まらないですよ？今日は兄さんに会いに来たんでしょ？」

「ん？俺に？」

なんだ、昼休みに雅が言っていた子はこのバスタオルちゃんのことだったのか……………。

「とりあえず、自己紹介したらどうですか？ほら詩織。」

「う、うん。」

雅に言われて、詩織と呼ばれた少女が顔を上げる。

「はうう……………／＼／＼」

そしてまた下がる。なんか見てて面白いなこの子……………。

「もう！どうしたんですか詩織？あなたが恥ずかしがりなのは知ってますが、今日はいつも以上に顔が赤いですよ？」

「だ、だって和樹さんが聞いてたより、その、カ、カッコイイんだもん……………。」

「え？」

何？今なんて言ったこの子？

「ごめん。よく聞こえなかった。もう一回言ってくれろ？」

「そ、その和樹さんが、聞いてたよりずっとその、カ、カツコよくて…………はう／＼／」

「そ、それはどうも……………」

うひょおおおおおおお！カツコイイって言われてしまった！そんなことを言われたのは17年ぶりのような気がする！嬉しい！

「詩織、すぐに眼科に行きましょう。今ならまだ間に合うかもしれない。」

「オイ待てコラ！」

相変わらずふざけたことをサラッと言いやがるなこの一番おっきい妹は。

「ふう。詩織に幻覚が見えたのは分かりましたから早く話を進めてください。」

こいつは意地でも俺がカツコイイと言われたことを認めないつもりか？

「う、うん。」

そう言ってやっと顔を上げて俺を見る詩織。

さっきまでは顔をよく見れなかったが、こうやって見るとずいぶん

と可愛い顔をしている。目はくりつとしていて、鼻筋もスツと通っている。髪の毛は若干茶色がかったショートボブ。毛先がクセなのかくるつと内側に丸まっている。背は160cmないくらいかな？とにかく笑顔がとっても可愛い。守ってあげたくなるような女の子だ。

「は、初めまして。佐倉詩織と言います。」

「ん？佐倉？」

はて？どこかで聞いたような？

「あつ！もしかして綾の……………」

「ああ！やっぱり和樹さんだったんですね！そうです！私が綾の姉の詩織です！」

「どおりで……………」

誰かに似ていると思ったら、入学式の日に会った綾のお姉さんだったとは……………。うん、言われてみれば笑っているところとかそっくりだ。

「あの日は本当に綾がお世話になりました。綾とはぐれてしまったときはどうなることかと……………」

「いや、いいよ。それより綾は元気？」

あれから綾とは会っていない。ちゃんと学園には馴染めただろうか。

.....。

「は、はい。今日もクラスの皆に和樹さんとの婚約話を熱く語ってきたと言っていました。」

「なんの話だ！？それは！？」

婚約話！？どこからやってきたんだそんな話！？

「ひゃう！な、なんか和樹さんに結婚してくれと言われたって.....はうう／＼／」

お、思わず詩織の手を握ってしまった。そ、それより！

「お、俺、そんなこと言っていないんだけど！？」

「で、でも、綾は確かに和樹さんが夜中にわざわざ綾の部屋に来て言ってくれたと.....。」

「それは夢だ！妄想だ！幻覚だ！」

どおりで最近愛菜の機嫌が悪いと思った！そんな噂が初等部で流れているとは！！

「そ、そうですね。」

「ああ。家に帰ったらよく言っといてくれ.....。」

「は、はい。」

~~~~~

「あら、もうこんな時間ですか。詩織、時間は大丈夫ですか？」

「あっ！うん。じゃあそろそろ帰るね。」

そう言って詩織は鞆を持って玄関に向かっていった。

「今日はどうもありがとうございました。」

「おう、綾にもよろしくな。」

「はい。．．．あ、あの。」

「ん？」

詩織がなぜか顔を赤くしてもじもじしている。なんだ？

「ま、また、お邪魔しにきてもいいですか？」

「なんだそんなことか。うん、いつでも大歓迎だ。次は綾も連れてきたらいいさ。」

そう言って俺は手を差し出す。

「ふえ！？」

「握手だよ、握手。」



「は、はい！」

そう言っつて、詩織も手を出してくる。

「あつ！兄さんそれは……！」

「えっ？」

雅が何かを言う前に俺と詩織の手は重なった。はは、詩織ったら力チンコチンに緊張しちゃって……。

ガシッ！！

バキゴキバキヤ！！

「詩織はこう見えて怪力の持ち主だから迂闊に手を出さない方がいいですよ？」

「もっと早く言っつてほしかったなあ！！！」

詩織にめいっっぱい握られた俺の右手はガンダムのように腫れ上がっていた。

第二十話 佐倉姉 後編（後書き）

安西先生ごめんなさい!!

行間一マスにしてみました。どっちが見やすいですかね・・・？

## 番外編 登場人物紹介1（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

本編の途中ですが、読者様から『キャラが多すぎて、個性や特徴がわかりづらい。整理しづらい』と言うご指摘を頂いたので、ここで番外編という形で、軽く登場人物の紹介をしたいと思います。

これが少しでもご指摘の解決策になればと思いますので、個性や特徴が多すぎてもご指摘の解決策になればと思います。本編を楽しみにしていた方、ごめんなさい。なるべく早く本編のほうも投稿できるように頑張りますのでこれからもよろしくお願いたします。

それでは番外編、どうぞ。

年齢表記ですが、数え年で表記していますので、本編ではまだ春ですが全員『現時点での年齢+1』となっています。

## 番外編 登場人物紹介 1

せがわかずき  
瀬川和樹

この物語の主人公。瀬川家の長男。

【性別】 男

【年齢】 17歳 (高2)

【誕生日・血液型】 8月16日・O型

【身長・体重】 173?・61?

【性格】 物事をあまり深く考えない楽観的な性格。ロリコンでシスコン、変態疑惑あり。

【髪型】 髪色は黒で長さは普通。特にこだわりはなく適当。

【容姿】 中肉中背。顔はそれなりに整ってはいる。が、性格が災いして不細工に見える……。らしい。

この物語の主人公。本来二人しかいなかった妹が急に三人が増えて、一気に妹五人持ちに。親は父がおらず、母のみ。基本的に深くものごとを考えないタイプ。急な出来事が起きてもさほど驚かない。学業のほうは壊滅的。良に次いでの下から二番目の成績を誇る。普段



瀬川家に新しくやってきた和樹の義妹であり長女。普段は常識人であり、妹達の面倒見もいい良いお姉さんである。が、たまに変人化する。特に兄に対する態度は妹の領域を遥かに超えてしまっている。学業は学年トップレベルの才女。人当たりもよく、友人が多い。家事が得意。運動は苦手。恋愛に関しては今のところ特に目立ったこととはない。兄のことをどう思っているかは不明。兄の呼び方は『兄さん』

せがわちなつ  
瀬川千夏

和樹の妹。瀬川家の次女。

【性別】 女

【年齢】 15歳(中3)

【誕生日・血液型】 7月7日・O型

【身長】 163?

【性格】 まるで男のような性格。なにごととも豪快、また無邪気。兄曰く、乙女な部分もあるとかないとか……。

【髪型】 セミロングの髪色は染めていて金。あまり手入れしないのとクセ毛も手伝ってあっちこっちに飛び跳ねている。が、本人は気にしていない。

【容姿】 勝気な瞳、ライオンのように跳ねた金髪、スラッと伸びた手足が特徴。モデル体型。笑顔は太陽をイメージさせる。胸はC。

和樹の実妹。瀬川家の次女。顔立ち、体型共に抜群の美少女。その性格は豪快で明るい。常に楽しいことを探しているアウトドア少女。何かを深く考えることが苦手。その分、スポーツは超万能。その明るい性格から、男女問わず人気が高い。学力は普通。やればできるが、やらないので普通。兄のことを尊敬している。休みの日は兄と遊んだり、妹と遊んだり、とにかく遊んでいる。家での普段着は兄のTシャツに自分のパンツという最強装備。兄の呼び方は『兄ちゃん』

せがわかな  
瀬川佳奈

和樹の妹。瀬川家の三女。

【性別】 女

【年齢】 14歳（中2）

【誕生日・血液型】 4月26日・B型

【身長】 160cm

【性格】 ツンデレ。

【髪型】 茶色がかった髪を左右に結っている。ツインテールっぽい  
いが、そこまで長くはない。

【容姿】 パツと見は猫を連想させる。気の強そうなつり目にむつ  
と結ばれた口。一見無愛想に見えるが、笑うと年相応の可愛らしさ  
が伺える。以外に童顔。胸はA。

もももとは雅の妹で、和樹の義妹。瀬川家の三女。幼い頃から大変  
な目に会ってきた影響か、ちよつと性格は素直ではない。が、心根  
は寂しがりな普通の女の子。外見とは裏腹に以外と真面目。運動は  
そこそこ、料理は壊滅的。学業も優秀で、クラスメイトからの信頼  
も厚い。が、兄に対してはなぜか凶暴。言葉より先に手がでる。色  
恋沙汰に不慣れで、純情な一面も。性格としては最強属性の『ツン  
デレ』を所有しているため、一部の生徒から圧倒的な人気を誇る。  
が、彼女が彼らにデレるかは不明。胸が小さいことを密かに気にし  
ている。兄の呼び方は『兄貴』

瀬川優希せがわゆき

和樹の妹。瀬川家の四女。

【性別】 女

【年齢】 14歳(中2)



【誕生日・血液型】 3月21日・A型

【身長】 155？

【性格】 大人しめな性格。あまり自分の感情を表に出さない。少し天然。

【髪型】 髪は短め、首筋にかかるかかからないくらい。色は若干青みがかった黒。毛先がぴよこつと左右に跳ねている。

【容姿】 身長は低く細身。小顔にくりつとした目、そこにちょこんとのった鼻と口。瞳は少し青い。身体は細いが柔軟性があり、健康的。胸はB。

佳奈と同じ中学2年生。和樹の義妹で、瀬川家の四女。初対面の人が見たら、無表情で感情が読めない美少女といった感じだが、共に時間を過ごしていると、その表情の中にもそれなりの変化があることが分かる。何やら人の『匂い』が分かるらしく、それで良い人かそうでないかを判断しているとか。ちなみに兄の匂いはとっても良いにおいらしい。性に関しては天然で、いつも兄が鼻血という犠牲を払っている。何事もそつなくこなす、オールマイティタイプ。こう見えて運動能力は高い。走ることが好きで、毎朝ランニングをかかさない。瀬川家で唯一、部活に入っている（陸上部）。兄の呼び方は『お兄』

せがわまな  
瀬川愛菜

和樹の妹。瀬川家の末っ子。

【性別】 女

【年齢】 11歳（小5）

【誕生日・血液型】 1月18日・A型

【身長】 146？

【性格】 しつかりしている面もあるが、まだまだ甘えんぼ。兄のことが大好き。怒ると超怖い。

【髪型】 黒のショート。優希よりも若干短い。サラサラの前髪はきれいに切りそろえられている。

【容姿】 ぱつちりとした瞳に、まだまだ幼さの残る顔立ち。それでいて将来への可能性をひしひしと感じさせる全体像。言うなれば美少女。胸はこれから。

和樹の一番下の実妹。瀬川家の末っ子。性格は普段は大人しめですっかりもの。だが、やはりそこはまだ小学生、甘えたい盛り。特に兄のことが好きで、兄と遊んだり話したりすることを何よりも楽しみにしている。家族が増えたことを誰よりも喜んでいて優しい女の子。が、たまに暴走する。そして瀬川家で一番怒ると怖い。愛菜

は普段自分のことを『私』と呼んでいるが、怒ると『愛菜』と名前  
で呼ぶようになる。そうなたらもう終わり。瀬川家（主に兄）は  
終焉の時を迎える。小学校では人気者。友達作りの天才。兄の呼び  
方は『お兄ちゃん』

せがわるい  
瀬川瑠璃

和樹たちの母親。生粋の変態。

他・調査中。

## 番外編 登場人物紹介2

いなばりよう  
稲葉良

和樹の親友。学園一の変態。

【性別】 男

【年齢】 17歳(高2)

【誕生日・血液型】 5月12日・B型

【身長・体重】 172?・63?

【性格】 変態。

【髪型】 黒の短髪。

【容姿】 以外と筋肉質。黙っていればイケメンに見えないこともないが、口を開けたとたん不細工に大変身。

和樹の数少ない友人の一人。見た目はそれほど悪くないが、思考や行動がぶっ飛んでいるため、学園一の変人として名を轟かせている。和樹との馴れ初めはまた本編で。基本的な行動理念は『女子』が全て関わっている。どうすれば女子と仲良くなれるか、どうすれば彼女ができるか、常にそんなことを考えている。成績は堂々の学年最

下位。どうやって進級したのかは最早都市伝説。最近は空を飛んだり、目を開けたまま寝たりと人間の枠をはみ出しかけている。でも悪いやつではない。和樹の呼び方は『和』

つきしまあおい  
月島葵

今年できた和樹の女友達。『すぐに使える魔法部』唯一の部員にして部長。

【性別】 女

【年齢】 17歳（高2）

【誕生日・血液型】 11月11日・AB型

【身長】 168？

【性格】 変人。以外と打たれ弱く、素直な性格。

【髪型】 黒のロング。雅とは違い、ストレート。

【容姿】 出るところは出て、くびれるところはくびれている、スタイル抜群のお姉さん系美人。切れ長の目に魅惑的な口はあらゆる男を悩殺する。胸はE。

和樹と良がたまたま訪れた『すぐに使える魔法部』で知り合った少女。そのダイナマイトボディと人をくつたような話し方でいつも和樹と良をからかっている。が、実は自分がからかわれることには慣れておらず、不測の事態に弱く、また打たれ弱い。また『魔法』とやらが使えるが、どれも利便性は乏しい。高校一年のときはその美貌と、変人具合のせいで友達ができず、学園をつまらないと感じていた。しかし、和樹と良（主に和樹）に出会い、友達として接してくれることに密かに感謝をしつつ、今は学園生活を楽しんでいる。和樹のことがちょっぴり気になっている。和樹の呼び方は『和樹』

佐倉詩織  
さくらしおし

雅の友達でありクラスメイト。綾の姉。

【性別】 女

【年齢】 16歳（高1）

【誕生日・血液型】 9月20日・A型

【身長】 159？

【性格】 恥ずかしがり。不器用。妹思い。怪力。

【髪型】 茶色のショートボブ。左右の毛先が内側に丸まっている。

【容姿】 かなりの童顔。パツと見では中学生のように見える目鼻

立ち。一番の魅力は笑顔。笑っている顔を見るだけで幸せになりそうなイメージ。古き良き日本人体型。胸はC。

雅の友達でクラスメイト。綾の姉。かなりの恥ずかしがりで、特に異性との会話はほぼ不可能。それでいて赤面症。緊張するとトマトのように赤くなる。口癖は『はうう……。』。和樹とは妹の綾経由から知り合いに。和樹に深い感謝の念を持っていると共に、カッコイイとも思っている。目が腐っているのかもしれない。雅と仲が良く、いつしよにすることが多い。実はとんでもない怪力。あの細腕のどこにそんなパワーがあるのかは誰にも分からない。家事は万能。だがドジっ子。すぐパニックになる。和樹の呼び方は『和樹さん』

佐倉綾  
さくらあや

詩織の妹。小学4年生。ロリ。

【性別】 女

【年齢】 10歳(小4)

【誕生日・血液型】 2月6日・A型

【身長】 138?

【性格】 天真爛漫という名がぴったりの女の子。寂しがりという一面も。

【髪型】 左右の髪を可愛らしいリボンでちょこんと括っている。

【容姿】 小学生らしい健康そうな見た目。とにかく目が大きくて可愛らしい。顔立ちは姉とよく似ていて、優しい印象を受ける。手足がスラッと長い。胸は将来に期待。

詩織の妹で小学校4年生の女の子。天真爛漫という言葉を身体で再現したような少女。和樹とは入学式で出会って以来、よく懐いている。何事にも好奇心旺盛で、あまり人見知りをしないタイプ。だが、その反面、一人でいることは苦手。寂しがり屋という面もあり、そこは小学生らしい特徴だ。姉のことが大好きで、姉妹仲良し。和樹のロリコン疑惑を作り上げた張本人。和樹の呼び方は『和樹お兄ちゃん』

## 【その他の人物】

ちばかなえ  
千葉香苗

夢ノ宮学園の風紀委員長。ふわふわの髪で、眼鏡をかけて、気の強そうなつり目をしている。和樹達と同じ高2。いつも面倒ごとを起こす和樹と良を常にマークしている……らしい。



高橋香織 たかはしかおり

般若。もうこれだけで伝わると思う。凶暴。鬼。化物。人外。

田中 たなか

和樹と良のクラスメイト。いろいろと大変な目に会う可哀想な奴。

番外編 登場人物紹介2（後書き）

どうですかね？もつとこのキャラのここが知りたいというのがあれば、本編に差し障りのない範囲で答えさせていただきますので気軽に感想お願いします。

これで少しでも和樹達のことを知っていただければ幸いです。  
それではまた本編で会いましょう。

## 第二十一話 トランプの悪夢 前編

「うあゝ。暇だゝ。兄ちゃん遊べゝ。」

4月最後の土曜日である今日、昼間っからなぜか俺は千夏に襲われていた。

「止める、引っ付くな。そしてお前はいい加減下を穿け！」

相変わらず千夏は俺のTシャツと自分のパンツしか着用していなかった。なんでこいつはいつつもいつつもこの格好なのだろうか……。

「ちえ！しょうがないなあ……………」

そうやって千夏はパンツの上からも一枚パンツを穿いていた。もうこいつは駄目かもしれない。

「はあ……………。いきなりなんだお前は……………」

「暇すぎて死にそうなんだよ。兄ちゃんも暇だろ？私と遊べ。」

「  
そうやって俺のTシャツとデュアルパンツで床をゴロゴロと転がる千夏。これが妹だと思つと涙が出そうだ……………」

「俺は忙しいんだ。愛菜とでも遊んでろ。」

「友達とどっか行った。」

「じゃあ優希。」

「部活。」

「佳奈。」

「買い物。」

「雅。」

「婦人会でのお茶会。」

ぬうう！最初の三人は分かるが最後の一人は明らかにおかしいだろ  
う！

「いいだろ？最近兄ちゃんと遊んでないから、私の中の兄成分が  
枯渇の危機なんだよ。」

なんだその怪しい成分は……。

「ちなみにその成分が無くなるとどうなるんだ？」

「無性に兄ちゃんが殴りたくなる。」

「わあ！兄ちゃん急に千夏と遊びたい気分になってまいりました！」

なんて恐ろしい成分なんだ……。千夏とは定期的に遊ぶこと

にしよう……。

「ホントか!? やった! 兄ちゃんならきつとそう言ってくれると信じてたぜ!」

「当たり前だろ?」

まだ死にたくないからな!!

~~~~~

「で、何して遊ぶんだ? ゲームでもするか?」

遊ぶと言ったはいいものの、二人でできる遊びなんて限られてるからな……。

「うんにゃ、トランプやるっぜ。トランプ。」

「トランプ? そんなんでいいのか?」

これまた千夏らしくない遊びを提案してきたな……。千夏のことだから対決ゲームとか提案してくると思ったけど。

「いや〜。実はさ、今度遠足があってみんなでトランプやるっつて話になったんだけど、私あんまトランプ知らないからさ。予行演習っついで。」

「トランプに予行演習なんていらねえだろ……………」

「どっだけやる気満々なんだよ……………」

「まあ、いいじゃん。やるつぜ。兄ちゃん。」

「まあお前がいいならいいけど……………」

「そう言ってトランプを出す千夏。どうやら初めからこれが目的だったらしい。」

「じゃあ、とりあえずババ抜きから……………」

「一瞬で終わっちまうわ!!」

二人でババ抜きほどつまらんゲームはねえだろ!!下手したらカード配って終わりだ!今だかつてない速さでゲームが終わっちまうぞ!!

「そっか……………」

少しシヨンボリして俯く千夏。ちょっと強く言い過ぎたか?

「もっとこう、すぐ終わらないやつにしろよ……………」

「じゃあアウト。」

「一生終わらねえよ!!」

こいつの提案するゲームは駄目だ。俺が提案してやるつ。

こんな感じで全然進んでいなかった。提案するゲームを間違えたかもしれない。

「兄ちゃん、なんか飽きてきた。」

「そうだなあ。」

「ただいまー。」

この永遠とも思われる神経衰弱に俺と千夏が屈しそうになりかけていると、玄関から声が聞こえてきた。この声は愛菜だな。

「丁度いい。俺達もちょっと休憩にしようぜ。」

「うん。分かった。」

そう言って、神経衰弱を一時中断する。

「あれ？お兄ちゃん達トランプやってたの？いいなー。」

「おかえり愛菜。おっ、優希もいっしょだったのか。」

玄関から現れたのは声の主である愛菜だけではなく、部活用の鞆を持った優希もいっしょだった。

「帰りにね、丁度会ったんだ！だからいっしょに帰ってきたの！」

「……ん。ただいま。」

「おかえり。部活お疲れさん。先にシャワーでも浴びるか？」

部活の後だからかなり汗もかいたはずだ。きつと体中がべたべただらう。

「……………ん。そうする。」

「さては、また兄ちゃんもいつしよに入る気だな!？」

「入りません!」

またってなんだ、またって。千夏のやつ変なこと言いやがって……………。

「……………いつしよに入る?」

「え?」

ちよ、ちよつと優希さん!? 兄を動揺させようたってそうはいきませんよ? さあ、静まれ我が鼓動よ! 止まれ我が煩惱よ!

「お兄ちゃん……………。どうして鼻血が出てるのか愛菜に教えてほしいなあ……………。」

「うおわあ!」

やばい! やばい! 愛菜の自分の呼び方が『私』から『愛菜』に変わっちゃまってる! ああ! 愛菜の周りにどす黒いオーラが充満してい

るーじ、時空が捻じ曲がる！

「ほ、ほら！愛菜、優希がシャワー浴びたらいっしょにトランプやろうな！兄ちゃん愛菜と遊びたかったんだ！」

「えっ？ほんとに？やったー！」

ほっ。何とか助かったみたいだ……。

「そう言うことだから、優希も早くシャワー浴びてこいよ。な？」

「……………ん。」

そう言って優希が風呂場に歩いていく。ん？

「どうした？千夏。そんな頬を膨らまして……………」

「ふーんだ！なんでもねえよ！」

そう言ってそっぽを向いてしまう千夏。なんだあいつ、いきなり……………。

「私のときは乗り気じゃなかったくせによっ！」

「ん？何か言ったか？」

「なんも言ってねーよ！兄ちゃんのバーカバーカ！」

それから優希がシャワーからあがるまで千夏の機嫌は悪いままだつた。何故だ……。

第二十二話 トランプの悪夢 中編

「えへへ。お兄ちゃんとトランプ〜トランプ〜。」

トランプを胸に抱えた愛菜は俺の膝の上で嬉しそうに足をパタパタさせていた。ふふ。まるで天使のようだ。

「がるるるる。．．．。」

そしてなぜか突然機嫌が急降下してしまった千夏は俺の頭に齧りついていた。このまま丸呑みにされてもなんら不思議ではない勢いだ。

「．．．．．おまたせ。」

シャワーを浴び終えた優希がトコトコ歩いてくる。

「おお。可愛い服着てるじゃないか。」

薄桃色のワンピースを着た優希を見てそう言う。いつものボーイッシュな服もいいが、こういった女の子らしい服もよく似合っている。

「．．．．．ん。」

嬉しそうに、そしてちょっと恥ずかしそうに微笑む優希。まるで女神。

「お兄ちゃん！私は？」

優希に対抗心を燃やしたのか、ズイッと愛菜が顔を近づけて聞いて

くる。こつこつとところはしつかり女の子だよなあ。

「ああ。もちろん似合ってるさ。その胸元のリボンとか特にな。」

「えへへ。ありがとう！お兄ちゃん！」

そう言っただけ嬉しそうに頬を染める愛菜。

「兄ちゃん！私は！？」

さっきまで俺の頭を齧っていた千夏が前に躍り出てポーズをとる。とても頭の裏がスースーするのは気のせいだと信じたい。

「ああ！まるでボクサーのように凜々しいパンツだ！きっと世界を狙えるぜ！」

「なんで私だけパンツなんだよ！このロリコン鼻血製造機！」

「ヤメロ！そのあだ名はなんか危険すぎる！それにお前パンツしか穿いてねーだろ！」

「兄ちゃんの目は飾りか？ビー玉なのか？ちゃんと上にタイムセールでも売れ残りそうなイカスTシャツ着てるだろ！？」

「それは俺のだ！」

しかも何かさりげなく馬鹿にされてる俺のTシャツ。ゴリライオンの洪さが分からないとは千夏もまだまだ子供だな……。

「うう。ここまでコケにされたのは初めてだ……。兄ちゃん！勝負！トランプで勝負！ここにいる四人で勝負だ！」

「ほう。この俺に勝負を仕掛けるとはいい度胸じゃないか。いいだろう。受けてやる。」

コケにされたのは主に俺のTシャツだがな。

「わーい！勝負勝負。」

「……………負けない。」

どうやら愛菜と優希も乗り気のようにだ。うん、たまにはこういう趣向の遊びも新鮮で楽しいかもしれない。

「して、千夏よ。一体何でこの因縁の対決に終止符を打つつもりなのだ？」

「ババ抜き！ババ抜きで勝負だ！」

ババ抜きか。これなら誰でも知ってるし公平なゲームだから皆楽しめるだろう。

「ふふ。この『ババ抜きマイスター』と呼ばれたこの俺によもやババ抜き勝負を挑むとはな、浅はかなり！」

ふっ！決まった！

「ババ抜きオイスター？そんなソース野郎なんかには負けるか！私は目玉焼きにはマヨネーズ派だ！」

「えー？目玉焼きはお塩がおいしいよ。」

「……………醤油が一番。」

「何の話だ！？」

いつの間にか話題がすり替わっていた。ちなみに俺は目玉焼きには塩コショウ派だ。

「まあいいや。とりあえず始めるぞ。ほらカードをくれ。」

そうして俺はカードを配りだした。

~~~~~

ババ抜き。それは呪われた遊び。ぐるぐるとまるでプレイヤーの生気を搾り取るように徘徊するジョーカーという死神。焦るプレイヤー、やってくるジョーカー。あがる歓声、減る人数。迫り来る罰ゲーム、流れる冷や汗。交錯する疑惑、ひび割れる友情。パニくる頭、手元から離れない死神。疑惑！圧倒的……………疑惑！

ふふ！この年になってまたこのスリルを味わうことになるとはな……………





「ジョーカーは千夏か。」

「!?!?な、なぜばれた!?!?オイスターの特殊能力か!?!?」

「お前今明らかに『チイツ』って言っただろ!?!それとオイスターから離れる!?!」

どうやら千夏はババ抜きに向いてないようだ。

「お兄ちゃん、引くよ?」

「ん?よし。」

愛菜の宣言によってババ抜き対決は幕を開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9706y/>

---

Sister Panic！！

2011年12月23日03時47分発行